
一面の霧の中で

ちやあるず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一面の霧の中で

【Nコード】

N3282T

【作者名】

ちやあるず

【あらすじ】

親と身体の都合からこの春八十稲羽に引っ越してきた有里湊。この街と湊の心を覆う一面の霧の中、特別捜査本部はマヨナカテレビの謎を解き明かし、連続殺人事件を解決できるのか？

キタローを幸せにするにはどうしたらいいか？この一心で書き始めたSSです。あまり逆行とかは書きたくなかったのでペルソナ3本編後のペルソナ4を舞台にしました。都合により、ペルソナ4のキアラ、舞台は原作より1年早まっています。しかしキアラ年齢は原作

プロローグ 4月?日 (前書き)

プロローグゆえ非常に短い文章となっています。

プロローグ 4月？日

気がつくと僕は見知らぬ場所にいた。しかし僕はこの場所に心当たりはないがなぜか懐かしさを感じていた。

「ほう・・・これはまた、本当に変わった定めをお持ちの方がいらしたようだ...。」

いきなりのことで気がつかなかったが、僕の目の前にはやけに鼻の長い老人と人間離れした美しさを持った金髪の女の人が座っていた。

この場所もそうだが目の前の二人、特にあの老人には何故か懐かしい。そう、とてもお世話になったような、そんな気がする。だけでも思い出せない。確かに今の僕にとっては仕方がないことかもしれないけど、あんな特徴的な鼻を持った人を忘れるのだろうか？

「私の名は、イゴール。ここは夢と現実、精神と物質の狭間にある場所・・・。本来は、何かの形で”契約”を果たされた方のみが訪れる部屋・・・。」

契約？少なくとも今の僕には心当たりはない。いったい何のことなのだろうか？それにしても...

「貴方には、近くそうした未来が待ち受けているのやも知れませんな。」

どうしてだろう、この会話は以前にもしたような気がする。思い出そうとするがやっぱり頭痛が邪魔をして思い出せない。だったら

やっぱり去年に出会った人なのだろうか？

「どれ・・・まずは、お名前は”有里 湊”様でよろしいでしょうか？。」

「確かに僕の名前は有里湊ですがどうして知っているのですか？僕の気のせいかと思っていたのですが、去年僕は貴方とあっているのでしょうか」

「・・・ふむ、なるほど。」

やはり貴方はあの事についての記憶を失っているようですね。

確かに私と貴方は昨年お会いしました。しかし、私と貴方がどのような関係だったのか、それを私が貴方に教えても意味がない。本来ならば私と貴方はもう会うことはないはずでした。しかし今こうしてこのベルベットルームで貴方と再び会い見えた。この場所では意味のない出会いは起こらない。故にこの二度目の出会いにもきつと何か意味があるのでしよう。だとすればその意味を見出すのはこの部屋の客人、そう貴方しかないのです。」

やはりイゴールさんとは去年会っているようだ。おそらくイゴールさんの言う「あのこと」とは不自然に記憶が消えている去年のことなのだろう。

「失礼、少々話がそれましたなでは、次は貴方の未来について、少し覗いてみると致しましょう・・・」

イゴールさんが台に手をかざすとイゴールさんの前にあった台の上にあるカードの束が現れた。

「“占い”は、信用なされますか？」

そういうとイゴールさんはカードを6枚使い六角形を作りその中心に1枚のカードを置いた。

「常に同じにカードを操っておるはずが、まみえる結果は、そのつど変わる・・・フフ、まさに人生のようでございますな。」

イゴールさんは僕から見て右手前のカードをめくった

「ほう・・・近い未来を示すのは“塔”の正位置。どうやら大きな“災難”を被られるようだ。」

別に僕は占いというものを信じているわけではない。でもこの空間のせいなのか、それともイゴールさんの雰囲気のせいなのか、何故かとても不安に感じた。

「そして、その先の未来を示しますのは・・・」

次にイゴールさんは左手前のカードをめくった

「“月”の正位置。”迷い”そして”謎”を示すカード・・・。実に興味深い。貴方は、これから向かう地にて災いを被り、大きな”謎”を解く事を課せられるようだ。

近く、貴方は何らか”契約”を果たされ、再びこちらへおいでになる事でしょう。今年貴方の運命はまたも節目にあり、もし謎が解かれねば、そして貴方が貴方自身を理解することができなければ貴方の未来は閉ざされてしまつやも知れません。」

どうして僕はこの人の言うことを疑いもせず信じようとしてし

まつのだろつか？こんな荒唐無稽なこと他の人に言われたら僕はまず信じないだろう。これが僕の見ている夢でないという根拠があるわけでもない。でも僕にはこれがただの夢だと、そしてイゴールさんが言っていることが嘘だとは到底思えなかった。

「私の役目は、お客人がそうならぬよう、手助けをさせて頂く事でございます。」

イゴールさんは手をかざすとテーブルの上からカードが消失した。

「おっと、紹介が遅れましたな。こちらは、マーガレット。同じくこの住人でございます。」

「今回のお客様の旅のお供を勤めさせて参ります。マーガレットと申します。」

今までイゴールさんに注目していたから気付かなかったがこの女性　マーガレットさん　の僕を見る目はイゴールさんのような驚きと純粹な興味ではなくもっと別の”何か”を感じた。

「あの、マーガレットさん、僕に何か？」

「私は貴方とはほとんど会った事がなかったから貴方に少し興味があつた。ただそれだけよ」

本当にそれだけなのだろうか？嘘は言っていないだろうが、本当のことは隠している。そんな感じがする。

「詳しくは追々に致しましょう・・・ではその時まで、ごきげんよう・・・」

イゴールさんのその言葉を聞いた僕は急に視界がぼやけそして意識を失った。

ブログ 4月?日 (後書き)

初の投稿SSです。遅筆ですが完結を目指して頑張っていきます。

第一話 4月11日(月)

電車は走る。両親が事故で死んでから何度か行つた、僕に対してごく自然に接してくれた数少ない親戚の所に。去年の記憶の一部を失つた僕を受け入れてくれるといった堂島さんの所に。どうみても怪しいとしかいえない境遇の僕を唯一引き取ってくれると言つてくれた優しい人の所に。

正直言つて僕は人づきあいが苦手だ。僕が八十稲葉に引越すことになつたことで多くの人が僕に別れのあいさつに来たことには正直驚いた。確かに彼らとは交流があつた。そのことは覚えている。しかしなぜここまで付き合ひになつたのだろうか？昔から無口なこともあり友達なんてそう多くはできなかった。いたとしてもそれは表面上の付き合いで友近や宮本のように泣き出すようなやつはいなかつた。何が僕を変えたのか？その要因については大体予想がつく。それはきつと失つた記憶が関係しているのだろう。何かきつかけがないと変われない、少なくとも僕はそういう人種だ。僕に何があつたのか、それはわからない。だけどそんなことはどうでもいい、思ひ出せないのだから。ただ心配なのは今堂島さんには一人娘がいるらしい。堂島さんにお世話になるといふことはその娘とも一緒に暮らすといふことだ。はたして僕はその子と仲良くすごせるのだろうか？

次は八十稲羽、八十稲羽お降りの方は…

どうやら目的地に着いたようだ。堂島さんからのメールによると、4時に改札口まで迎えに来てくれるそうだからもう待っているのかもしれない。早く行つたほうがいいのかもわからない。

駅から出たはいいが、僕には肝心の堂島さんの顔がわからない。何せ最後に会ったのは7年ぐらい前のことだ。それらしき人がいないかきよろきよろしているか一人の男性が声を上げた。

「おーい、こっちだ。」

声のほうを見てみるとまだ幼い少女を連れて一人の男性がいた。おばさんは僕の顔写真を堂島さんに送ったと言っていたので彼がこれからお世話になる「堂島 遼太郎」さんなのだろう。

階段を下り近づくと手を伸ばしてきたのでこっちも手を伸ばし握手をする。

「おう、写真で見るとよりも男前だな。ようこそ、稲葉市へ。お前を預かることになっている、堂島遼太郎だ。ええと、お前のお袋さんの、従弟だ。一応挨拶しとかなきゃな。」

「よろしくお願いします。」

「ははは、お前のオムツ換えたこともあるんだ、といっても覚えてないか。」

人の良さそうな笑顔で笑いながらとんでもないことを言い出した。僕の父さんが堂島さんと気があつたらしく、両親がいたころはよく八十稲葉に来ていたということは前におばさんから聞いている。しかしそんなことを堂島さんにさせていたとは…。そしてそんな事をよく覚えているものだ。

そんなことを考えていると堂島さんは横に立っていた女の子を僕の前に立たせた。

「こっちは娘の菜々子だ。ほれ、挨拶しろ。」

「…にちは。」

人見知りをする子なのだろうか？それとも初めて会う親戚に怯えているのだろうか？少々の沈黙の後、聞こえるか聞こえないかの音量で挨拶をしてくれた。そして挨拶をすませると早々に堂島さんの背後に隠れてしまった。当然の反応かと思う反面やっぱり少しさみしく感じる。まあ僕のこの頃よりはずっとしっかりしてそうだ。

「はは、こいつ照れてるのか？」

堂島さんが菜々子ちゃんを茶化すように笑うとそのことに怒ったのか菜々子ちゃんはいきなり堂島さんの尻をひっぱたいた。

「いてっ、はは。」

叩かれても堂島さんは笑っている。はっきり言って堂島さんのことはほとんど覚えていない。でもこの光景を見ていたらなんとなくわかる、この人はいい人だ。少なくともあのころに会った人たちとは絶対に違う。

叩いても堂島さんの様子が変わらないことで諦めたのか菜々子ちゃんはやんちゃよつと拗ねてしまったようだ。

「さあて、じゃあ行くか。」

車、こっちだ。」

堂島さんの先導に従い、僕は堂島さんの車に乗った。車の中では堂島さんとは他愛のない話をいくつかしたが、菜々子ちゃんとはほとんど話せなかった。堂島さんが話題を振ってくれたときには少し話せたがそれ以外ではさっぱりだった。こればかりは時間がた

ないとだめだとは思うが、やっぱり少しさみしい。早くごく自然に話せるようになりたいのだが、あまり社交的な性格とは言えない僕だから菜々子ちゃんが僕になれるのを待つしかないだろう。

そんなことを考えてると、菜々子ちゃんがトイレに行きたいと言いつつ、近くのガソリンスタンドに車を進めた。

「らっしゅっせー」

無駄に元気な掛け声である。笑顔のスタンド店員が駆け寄ってきた。

「トイレ、一人で行けるか？」

「うん。」

堂島さんがたばこを吸うためか外に出て、続いて菜々子ちゃんを外に出た。菜々子ちゃんはトイレの位置がわからないのかきよるきよるしている。するとスタンドの店員が菜々子ちゃんに声をかけた。

「奥を左だよ…左ってわかる？お箸を持たないほうね。」

「わかるっば。」

純粋な親切心だったんだろうが菜々子ちゃんには気に入らなかつたようだ。ちよつと怒ったように奥のほうに駆けて行った。…どうでもいいのだが菜々子ちゃんが左利きかもしれないってことは考えなかつたんだろうか？本当にどうでもいいことなただけ。

長い間電車で揺られていたこともあり背骨を伸ばしたかったので僕も外に出ることにした。空模様はいにくの曇りだがこれから住む街を見る。車内でも思ったことだが、巖戸台と比べるとずいぶん

田舎だ。今までは都会を転々としてきたから新鮮だ。

「どこからお出かけで？」

「いや、こいつを迎えに来ただけだ。都会から今日越してきてな。」

「へえ、都会からすか……」

「ついでに、満タン頼む。あ、レギュラーでな。」

「ハイ、ありがとうございます。」

巖戸台との違いを感じていると、堂島さんが店員さんと話していた。さすがにトイレだけを借りるのは申し訳ないと思ったのがガソリンも入れるようだ。

「一服してくるか……」

そういつと堂島さんはたばこを吸うためにスタンドから出て行った。すると店員さんが僕に話を振ってきた。

「君、高校生？」

突然のことで返事ができなかったがそんなこと気にしないとはかりに店員さんは話しかけてくる。

「都会から来ると、なーんもなくてビックリっしょ？
実際、退屈すると思うよ〜、高校の頃つつたら、友達んち行くとか、バイトぐらいだから。」

でさ、ウチ今バイト募集してんだ。是非考えといてよ、学生でも大

「丈夫だから。」

店員さんが近づき、握手を求めてきた。断る理由もないし手を差し出し、握手をした。するとほんの一瞬、普段なら気にしない様なぐらいの小さな変化だが店員さんが驚いたような表情になった。

「おっと、仕事しないと。」

何か変なことをしてしまったのかと聞こうとしたが、店員さんは菜々子ちゃんが戻ってくるのに気づくと車にガソリンを入れるべく働き始めた。

菜々子ちゃんがこっちを見ている。ここは頑張っで自分から話しかけるべきなのだろうか？話しかけるか迷っている和不意に眩暈を感じた。どこかで感じたような気がする眩暈だったが眩暈なんてどれも同じようなものだろう。菜々子ちゃんも僕の様子がおかしいことに気付いたのか不安そうにこっちを見上げてきた。

「大丈夫？車よい…？具合悪いみたい…」

「大丈夫だよ、ちょっと疲れたのかもね。」

堂島さんにならともかく、菜々子ちゃんに馬鹿正直に具合が悪いなど言えなかったから少し嘘をつくことにした。実際眩暈は大したことにはなかった。ガソリンスタンドから出るころには全く普段通りの調子に戻っていた。

「それじゃあ、歓迎の一杯といくか。」

堂島さんの家に着いてから僕は手荷物を僕にあてがわれた二階の部屋に押し込んで、夕食の準備をすることになった。堂島さんは今日ぐらいいは何もしなくていいと言っていたが、これから一緒に生活していくんだ。家事ぐらいはやらせてくれと言ったら菜々子ちゃんと一緒に配膳をしてくれと言われた。堂島さんは僕と菜々子ちゃんの会話のきっかけになってくれたらと思って仕事を割り振ったのだろつが、菜々子ちゃんは堂島さん曰く照れている状態、僕は口下手。結局最低限度の会話しかせずに終わってしまった。

堂島さんの音頭で、僕の歓迎会という名の夕食が始まった。堂島さんはウーロン茶、菜々子ちゃんはオレンジジュース、僕は冷蔵庫の中に入っていたリボンシトロン（何であったのか？これって北海道のみの商品じゃ…）で乾杯をした。

「しかし、兄さんと姉貴も相変わらず仕事一筋だな。また海外勤めだったか？追加で一年限りらしいがまだわからないらしいからな。保護者に振り回されてこんなとこに来ちまって…子供も大変だ。」

「そうですね、去年は父さんの知り合いだった幾月さんという方が寮のある月光館学園を紹介してくれたから助かったんですけど…」

そう、去年も僕の保護者である堂島さんのお姉さんとその旦那さんは仕事で海外に行ってしまった。僕のことでもかなり迷っていたんだが父さんの友人を名乗る幾月（月光館学園の理事長で、昔父さんに世話になった人らしい。）という人が寮のある高校を紹介してくれたので叔母さん達はオーストラリアに飛んでしまった。本来ならそのまま月光館学園にいればいいのだが…

「しっかし、成績も授業態度もよかったのに風邪の引き過ぎであそこまで休むとはな。そして三回の入院。ホント何があったんだ？」

「やっぱり、具合悪かったの？」

これが僕が今回堂島さんの所にお世話になるもつとも大きな理由である。

「正直、僕も不思議なんですよ。風邪の件は僕の自業自得なんですけど。」

僕は授業中に寝るといったような行為はしないし、テストでも毎回トップ10には入ってる。むしろ二学期以降は常にトップだった。しかしいくら成績が良くてもある一定数の出席がなくては単位が出ない。それが高校というものである。なぜか去年はやたらと風邪をひき、そして4月と2月と3月に急に意識を失い、その後生死の境をさまようということが起こった。それも原因は不明。

風邪をひいたのは体調が悪いのに無理して夜遅くまで勉強してたり、一人カラオケに行ったりしていい、同じ寮生に風邪をうつされたりしたからなただけど、倒れたことに関してはちょっと怪しいものがある。うつすらとだが病院で目を覚ました記憶はある。そこらへんの記憶が曖昧なものも急に意識を失った弊害なのだろう。倒れたのは全て寮生の前だったらしい。これに関しては寮で生活している以上寮生と関わる時間が多くなるのは当然だろうからこれも納得はいく。でも僕はその寮生の顔も名前もを全く思い出せない。僕の失った記憶はこの部分がほとんどを占めている。そして僕が記憶を失ったのは3月に記憶を失ったときだ。風邪の件はともかく僕の記憶と寮生がかかわっているのはまず間違いないと思っている。

しかし、医者は僕は寮生とあってはいけなめと言う。というのも、意識を取り戻してすぐに寮生の人たちは僕の面会に来たらしいのだ

が、僕は寮生と対峙したら急にショック症状が出て死にかけたらしい。ここまで来ると寮生たちに何かあるのはもう確定だと思っただが、医者が聞いても知らないの一点張りとのことだ。3回目の入院で僕の留年は決まったのだが、そこからが大変だった。

「一部の人に会うことで死ぬ可能性のある学校に通わずことはできないから、私の家から違う学校に通わせる」

というのが叔母さんの主張だった。まあ当然のことである。仕事の方も今年になったら叔母さん夫婦は日本に帰ってくることになるはずだったのだ。しかし、今度はブラジルに行かなくてはならなくなってしまったらしい。去年のオーストラリアでの仕事が成功してしまったため新たな大きなプロジェクトを任されてしまったらしい。そこで信頼のおける人物に預かってもらおうということになりお鉢が回ってきたのが堂島さんだったのだ。

「まあ、都会でいろいろと疲れたんだろ。最近は体調も安定してるようだし今年はこの田舎町でゆっくり休みな。」

「はい。」

「ま、家は俺と菜々子の二人だし、お前がいてくれると俺も助かる。これからしばらくは家族同士だ。自分ちと思っただけで気楽にやってくれ。」

「よろしくお願いします。」

「そんなにかたい挨拶じゃなくてもいいぞ、まあそれがお前の普通なのかもしれないが」

堂島さんは苦笑いだったが、満更でもなさそうだった。

「それじゃあそろそろ、メシにすつか」

3人がお寿司に箸を伸ばそうとした時に携帯の着信音がした。音のする方を見ると堂島さんのみたいだ。

「たく…誰だ、こんなときに」

堂島さんは不機嫌そうにぼやきながら携帯に出た。

「堂島だ。…ああ、…ああ、わかった。場所は？」

仕事で何かあったのか、堂島さんの顔から笑顔が消えて真剣な表情になり立ちあがった。

「わかった。すぐ行く。…酒飲まなくてアタリかよ。仕事でちよつと出てくる。急で悪いが、飯は二人で食っててくれ。

帰りは…ちよつと分らん。菜々子、後は頼むぞ。」

「…うん。」

奈々子ちゃんの返事を聞くと堂島さんは踵を返して玄関へ向かっていった。そして家から出たかと思えば堂島さんは大きな声で奈々子ちゃんに話しかけた。

「菜々子、外雨だ。洗濯物どうした？」

どうやら外は雨らしい。堂島家に着いた時の空模様を考えると不思議ではない。

「いれたー。」

奈々子ちゃんは堂島さんに聞こえるように大きな声で答えた。きつと僕が荷物整理をしている間にしていたのだろう。

「そうか。じゃ、行ってくる。」

洗濯物の無事を確認した堂島さんは雨の中仕事に行った。すると奈々子ちゃんはテレビをつけた。テレビは当たり障りのないニュースを流している。・・・明日は雨らしい。

「いただきます。」

「いただきます。」

奈々子ちゃんと二人きりになってしまったがとりあえず夕飯を食べることにした。

しかし、堂島さんが居ないと奈々子ちゃんとの会話に困る。こんな時はやっぱり自分から話しかけた方がいいのだろうか？きつとあいつなら躊躇なく話しかけるんだろうが僕にはちよつとハードルが高い。

・・・？あいつって誰だろう？ごく自然に頭に浮かんできたんだけど…？まあどうでもいいか。医者も無理に記憶を掘り出そうとしないでいいって言ってたし。

そういえば堂島さんは仕事で出て行ったけど、何の仕事なのだろうか？奈々子ちゃんと話してもできるし聞いてみようか。

「ところでお父さんの仕事って何なの？」

「じつと・・・ジケンのソウサとか。お父さん、けいじだから。」

「そうなんだ。こんな時間に呼び出されるなんて大変だね。」

ほんとに大変そうだ。こんな小さい奈々子ちゃんを家に一人にしていかになくちゃならないんだから。もしかしたらさつき堂島さんが言っていた「お前がいてくれると助かる」っていうのはこの事なのかもしれない。そんな事を考えていると天気予報が終わり、新しいニュースを流し始めた。

稲羽市議秘書生田目太郎の不倫問題から派生した進退の問題で夫人柊みずずは慰謝料請求愛人関係地元テレビ局”あいテレビジョン”は所属アナウンサー山野真由美を全ての担当番組から降板、問題解決まで出演を自粛する方針

「ニュースつままないね。」

まったくもってその通りだ。まだまだ小さい奈々子ちゃんにとっては面白くもなんともない内容だし、僕にとってもはつきりいってどうでもいい。何か事件が起きたとかならともかく、ただの不倫事件だ。こういう週刊誌向けの話題には興味はないのだ。普段テレビを見る方ではないがこれならバラエティー番組の方が面白そうだ。奈々子ちゃんはチャンネルコートを手に取り、チャンネルをいじった。普段からよく見ている番組が有るのだろう。迷わずある民法放送局に変えた。しかしその番組はちょうどCMの最中だった。

「エブリデイ・ヤングライフ！ジュネス！」

CMで奈々子ちゃんにはつまらないかと思えば奈々子ちゃんはのりりりでCMのまねをしていた。僕はあまり行った事はないがジュネスは有名なデパートのチェーン店だ。この八十稲羽の近くにもあるのだろうか？

奈々子ちゃんは僕の前でのりりりで真似をしていたのが恥ずかし

かったのか顔を赤らめながら僕に食事を進めてきた。

まだこつちに来て一日目。まだまだ奈々子ちゃんとの交流も焦る必要はない。取りあえず今はご飯を食べようか。

「そうだね。それじゃあ改めていただきます。」

「いただきます。」

夕食後食器を片づけ、僕はあてがわれた部屋に来ていた。まだ荷物を開けてないので部屋に段ボールが重なっている。まあ中身は本と着替え、そしてノートパソコンぐらいなんだけど…。取りあえず明日着る制服を用意して鞆に筆記用具を詰める。教科書は明日配られるらしいので必要ない。明日の用意もできた事だし、奈々子ちゃんに心配されていたから今日は早めに眠るとしよう。

これから始まる八十稲羽での生活。心に霧がかかったまま、僕の新たな戦いが静かに幕を挙げた。

この霧は、未だ晴れない・・・

第一話 4月11日(月) (後書き)

ここから本編が始まっていきます。まだ自分の文体というものを確立できていないため、若干おかしく感じる部分もあるかと思えます。その時はぜひ感想などで教えてくれればと思います。

誤字の修正と、一部改行しました。

第二話 4月12日(火) (前書き)

遅くなってしまいましたが、第二話目です。

第二話 4月12日(火)

一面の霧の中で

気がつくとも一面の霧の中、僕は立っていた。この間見た変な夢の続きかとも思ったがどうやら違うようだ。この間感じた既視感のよ
うなものはないし、なによりもあの眼に付く鼻・・・じゃないや、
イゴールさんが居ない。

ならばここはどこなのだろうか？霧が深くて視界は3メートルも
ないが、周りを調べてみるとどこかへとつながる通路のようであ
る。立っていた方には道が続いているようで、後ろは行き止まりだ
った。道幅はおよそ5メートルぐらいだろうか？道の両端には見え
ない壁が有った。これならこの霧の中足元が見えなくても床を踏み
外すことはないだろう、この壁がこれからもあるのならだが。

本来ならこんなわけのわからない状況で歩き回るのは得策でない。
この先で何が起るのかわからないからだ。ただ僕は足を進める。
どこからか懐かしい声が聞こえたような気がしたから。その声がと
ても大切なもののような気がしたから。その声は今の僕にとって必
要なもののような気がしたから。そんな不確かな考えの下、僕はこ
の一面の霧の中を歩くことにした。

「真実が知りたいって？」

どこからかはつきりと声が聞こえる。けれどこの声じゃない。僕
が探している声は、この声じゃない。そのことは分かっているが、
あいにくこの道は一本道だ。先に進むと決めた以上歩くしかない。
しかしこっちの声が言う真実って何なんだろうか？もしそれが僕の

記憶ならば知りたいんだけど…

「それなら・・・捕まえてごらんよ…」

しばらく歩くとまた声が聞こえてきた。先ほどの声と同じもの、つまりは探している声ではない。どうやら真実を知りたければこの声の主を捕まえればいいみたいだ。この霧の中この声の主を探せる自信はないが、この声の主も少し気になる。どうすればここから出られるのかもわからないのだから今やれることはやっておこう。

曲がりくねった道を進んでいくと壁のようなものが有った。なんとなくだがこの壁の向こう側にだれか居るような気がする。それがさっきの声の主なのか、一度聞こえたような気がした声の主なのかはわからない。もしかしたら全然関係のない誰かなのかもしれないでもここまでの一本道では何もなかったのだからこの先に進まないと何の進展もない。

問題はこの壁をどうするかだ。見た感じドアではなさそうだ。襖のような引き戸でもなさそうだ。取りあえずなにか仕掛けがないか探してみようと触ってみたら、あっさりと壁は消えた。この壁について疑問に思うところはあるが、壁の先に進むことにした。

壁の先には霧でよく見えないが2人分の人影が有った。ひとつは僕よりも頭一つ大きいぐらいの、もうひとつは小学校高学年ぐらいの背丈のものだった。

大きな影が僕に向かって話しかけてくる。

「追いかけてくるのは君か…。ふふふ、やってごらんよ…」

(キミはいつたい何なんだい？いや、キミが何者なのかは大体想像

はつくんだけど。そんなことより、一体何が目的で湊に接触したんだい？今の湊はどこにでもいるただの高校生と一緒だ。わざわざこんなことをしてまで接触する意味があるのかな？)

「それは私のセリフだよ。私が呼んだのはそこにいる彼だけだ。どうして君のようなのがココにいる？」

大きな影の声色が少しキツイものになった。どうやらあの小さな影は大きな影にとってイレギュラーな存在のようだ。何を言ってるのかよくわからない。だけど、

「僕をココに連れてきたのはあなたですか？」

先ほどまでの会話を全て信じているわけじゃない。むしろ疑わしいことだらけだ。だけどこのままじゃ何も分からないうちにどんな話が進んでしまう。この二つの影はこの状況を大体把握しているみたいだが、あいにく僕はここがどこで今どういう状況なのか全く分からない。ならばせめて少しでも情報を集めないと。なんとなくだけど大きな影のほうの話が通じそうだから、そんな理由で僕は大きな影に問いかけた。

「へえ、この霧の中で私の位置がわかるのか。なるほどなるほど。確かに面白い素養を持っている。」

(そりゃそうだよ。その素養があったからこそ、記憶こそ失ってしまっただけで湊は今、こうして生きている。)

この二人の言っていることはまったくわからない。だけど、確証なんて無いがこの二つの影は嘘をついてない。そう思ってしまえるから余計この会話の意味がわからない。

「もう少し彼を観察していたいけど、流石にこのままじゃあ私が不利か。今日の所はここで失礼させてもらうよ。」

「待って下さい。あなたは、そしてここは一体何なんですか！」

急にあたりの霧が濃くなり、大きな影の存在感がどんどん薄くなっていく。このままでは大きな影はここから居なくなってしまうと直感的に悟り、僕は大声を出してしまった。

「ここでその事を教えても起きたら忘れてしまっただろうけど、それを教える事は出来ない。万が一覚えていられたら厄介だし、それにね、『真実』を知ろうとするならそれ相応の苦勞をしないと。」

僕はもはや霧の中にさっきまでいた大きな影を見つけれない。ただ『そこ』にいると感じる事で精いっぱいだ。だけど不思議な事に小さな影はこの一面に広がる濃霧の中、『影』という輪郭を保って相変わらず僕の前にいるように認識できる。

(僕はキミの事は気に入らないけど、湊がここで真実を知ってしまったのはちよっと困るかな。こんなところで知っていような類の記憶じゃないからね。)

「君は僕の事を知ってるの？」

僕は今はもう見えない大きな影の事はいったん考えずに、今僕が視覚で認識できる唯一の存在に話しかけた。どうやらこの影は僕の事を僕以上に知っている、そんな気がした。

(そうだね、僕は確かに湊の事を知っている。でもね、さっきアイ

ツに言ったように今ここで記憶を取り戻されては困るんだ。

大丈夫、時が来たら君は記憶を取り戻せる。そのために僕も協力する。アイツに目を付けられた以上、去年の記憶は君がこの霧を晴らすための大きな武器になるのだから。」

この影はこれ以上僕の事を教えてくれないだろう。そう感じるほどにはつきりと揺るがぬ意志を感じる口調だった。

「じゃあ、これだけは教えてくれないかな。君と僕は一体どんな関係だったんだい？」

(え?)

「だから僕と君の関係。君は僕の事を知っているんだろ。それに、僕の記憶の事、手伝ってくれるんだろ。」

(それは君の事は知ってるし、記憶の事も手伝うけど、アイツが言っただように目が覚めたらここでの事は忘れちゃうんだよ。そんな事を聞いても無意味じゃないか。それ以前に、どうして僕の言う事を信じれるの？僕はあからさまに怪しいじゃないか。)

どうしてこの影はそんな事であわてるのだろうか？

「少なくとも僕には君が悪い人には見えない。さっきまでだったあの大きな影から僕を守ろうとしてたんだろ。」

ちよつと考えればわかることだ。この影が居たのは僕と大きな影の前。そして大きな影との会話。その様子はまるで僕をあの影から守っているようだった。

(だからどうしてそんな簡単に信じれるの？言いたくないけど小さいころから君は周りの大人たちに散々利用されてきたはずだ。君は両親が亡くなった君を甘い言葉で惑わし、両親の遺産を好き勝手しようとしてきた汚い大人たちを沢山見てきただろ。それなのにどうして僕がうそを言っていないと思えるの？)

確かにその影の言うとおりだ。事故死した両親の保険金と財産を事故のショックで心に大きな傷を負った僕からむしり取ろうとした親族は沢山いた。そしてそんな親族に騙され、ひどい仕打ちを受けてきたのもほんとの事だ。

僕が今も他人と接する際にどうしても一步下がってしまうのはこの事が原因だ。まあ、そんな事があったからこそ去年の僕の友人関係の変化には疑問を感じずにはいられないんだけど。

「やっぱり僕の事を知っているんじゃないか。僕のその過去は親族ぐらいしか知らないはずだからね。」

それと、どうして君を信じられるかっていうのは、はっきりいってただの勘。」

(勘?)

「そう、ただの勘だよ。それ以外の理由はただの後付けにしかならないんだ。」

僕は君の事が信じられると思った。

そして君は僕の事を知っている。

なら、せめて僕と君の関係ぐらいは知っておきたいじゃないか。たとえここから出たら忘れてしまうものだったとしてもね。」

(・・・ははは。そっか。ただの勘か。なら仕方ないね)

「そんなに笑う事？」

突然、影は大きな声で笑い出した。そんなにおかしなことだろうか？

（いや、勘は大事だね。記憶を失っても、記憶を思い出せなくても、君は確かに憶えているんだ、去年何があったのかを。

僕たちは去年確かに君と会っている。それを君はきつと憶えてるんだよ。

そうそう、君の質問にそろそろ答えないとね。僕は君のトモダチだよ。一日の狭間の時間にだけ君と会えた僕にとっての唯一のトモダチ。それが僕と君の関係だよ。）

「そっか、友達だったんだ。御免ね。君の事忘れちゃって。」

本当に申し訳なく思う。影にとって唯一のトモダチの僕がその事を忘れてた、それはなんてひどい事なんだろう。

（別に気にしてないよ。僕の事を覚えていた方がそれは問題だからね。）

「そっなの？」

（うん、そこら辺は君の記憶が関係してくるんだけど…）

「そっか。なら無理には聞かないよ」

（ありがとう。）

(さて、そろそろここにいるのも限界かな?)

「そつなの?」

(うん、アイツがこの空間を閉じようとしているからね。)

「そつなんだ。」

もう君には会えないの?」

(いや、きつとまた会えるよ。それに言ったでしょ。君の記憶を取り戻す手伝いをするってね。)

「そつか。ならまたね。今度は、顔を見せてよ。」

(うん。それじゃあまたね…)

影との別れの挨拶を聞くと、僕の意識は次第に薄れていった。

「誰だつて、見たいものだけを、見たいように見る…」

そして霧は何処までも深くなる…

いつか…また会えるのかな…

こことは別の場所…

フフ、楽しみにしているよ…」

薄れゆく意識の狭間であの大きな影の声を聞いた気がする…

目覚めがいい。憶えてはないが何かいい夢でも見たのだろうか？
制服に着替え、居間に降りてくると奈々子ちゃんが朝食の準備を
していた。

「おはよ。」

「おはよう。」

どつやら堂島さんはまだ帰ってきていないようだ。いや、もしか
したらもう仕事に行ってるのかもしれない。
とりあえず朝食の準備ができているようなのでテーブルに着く。

「よしつと。じゃ、いただきます。」

「いただきます」

朝食は洋風のようにトーストと目玉焼きがあった。

「朝ご飯は菜々子ちゃんが作ったの？」

「朝はパンをやいて・・・あと、メダマ焼き。
夜は、かってくるの。お父さん、つくれないから。」

「そうなんだ。おいしいよ、この目玉焼き。」

「目玉焼きならだれが作っても同じだよ。」

そういつつも菜々子ちゃんはうれしそうだ。実際、この目玉焼きはおいしい。ちゃんと半熟になってるし、焦げてもない。

それにしても堂島さんは料理ができないのか…。まあなんとなくそんな気がしてたけど。

「ねえ、今日から学校でしょ？」

とちゅうまで、おんなじ道だから

・・・いつしよに行い。」

菜々子ちゃんはそわそわしてる。菜々子ちゃんともっと仲良くなるチャンスだし断る理由もない。

「そうだね。一緒に行こうか。」

「うん。」

よかった。菜々子ちゃんは笑ってくれた。今日一日何かいいことが起きそうだ。

雨の中、傘を差して通学路の鮫川河川敷を菜々子ちゃんと一緒に歩く。僕は青い傘、菜々子は黄色い傘を差している。ここに来るまでは本当に他愛のないことを話していた。僕が今までどんなところ

に引越してきたのかとか、八十稲葉はどんなところなのか、ジユネスはどんなお店なのかとか。

「あと、この道、まっすぐだから。

わたし、こつち。じゃあね。」

そんな会話をつづけていると、高校まで一直線で行ける道まで来たらしく菜々子ちゃんは残りの道を教えてくれると、今来た道を戻ろうとしていた。

「どうやら菜々子ちゃんの通う小学校はもつと前に曲がらなくちゃいけなかったみたいだ。僕のこと気遣ってくれたのかな？」

「わかった。ありがとね、菜々子ちゃん。じゃあね。」

「うん。」

菜々子ちゃんは走って行った。

さて、それじゃあ高校へ行きますか。

しばらく歩いていると、交差点にたどり着いた。もう視界には学校が映っている。菜々子ちゃんの言っていた通りまっすぐ歩いていけば高校にたどり着けそうだ。昨日学校までの地図を見ただけだったからちよつとだけ不安だったんだけど、これなら遅刻せずに済みそうだ。担任がどんな人なのかは分からないけど、初日から遅刻するのは流石に心象が悪いだらう。ただでさえ出席日数の関係上で留

年しているのだ。今年はしつかりしたいものである。

そんなことを考えていると、後ろから男子学生が雨の中傘を差しながら黄色いマウンテンバイクに乗って僕を抜き去って行った。

あんな恰好じゃバランスがとれるわけがない。現に自転車は蛇行しながら走行している。もし車が来たり、人が飛び出してきたら転びそうだ。というか思いつきり電柱に向かって…

どうっ

と鈍い音がした。そしてその直後、

きんっ

と鋭い音がした、そんな気がした。

はつきり言って自業自得なのだが、それにしてもひどい。同じ男として同情する。あれは痛い。味わったことのある人にしか分からず、男なら想像することはできても女性には決して想像することすらできない。あれはそんな類のものだ。

学生はうめいている。どうしようか。あれを見てしまった以上優しくしてやるべきなのだろうが、あいにく転校生なので学校に着いてからどれだけ時間がかかるか分からない。早く済むこともあれば、結構時間がかかることもあった。だから彼には悪いが心の中であやまりつつ、そっとしておくことにした。

それからちよつと歩くと高校の正門に到着した。

この先どんな高校生活が待ち受けているのか、楽しみと思う以上に不安があった。特殊な記憶喪失をしている留年している同級生。

この学校の人は、そして同じクラスになる人はこんな僕を受け入れてくれるだろうか…

僕の担任は諸岡先生と言うらしい。第一印象ははつきり言っておりよくない。ぶつぶつ僕の悪口を言っている。僕の履歴を知っているのだからしょうがないと言えましょうがないのだが、これならまだ陰口をたたかれた方がまだましだ。

教室の前まで来た僕は諸岡先生と一緒に教室に入る。入るとすぐに諸岡先生は「静かにしろー！」と叫んだ。すると生徒はみんな静かになった。この

「今日から貴様らの担任になる諸岡だ！
いいか、春だからって恋愛だ、異性交遊だと浮ついてんじやないぞ。

ワシの目の黒いうちは、貴様らには特に清く正しい学生生活を送ってもらおうからな！」

なんかクラスの人はいやそうな顔をしている。やっぱり生徒間の評判は悪いみたいだ。

「あー、それからね、不本意ながら転校生を紹介する。
ただれた都会から、へんぴな地方都市に飛ばされてきた哀れなやつだ。

さらには出席日数が足りなく留年している。

まさに落ち武者だ、分かるな？
女子は間違っても色目など使わんように！」

カチンときた。菜々子ちゃんや堂島さんがいい人だったから余計に諸岡先生の性格が嫌に感じる。

「では、有里湊。

簡単に自己紹介しなさい。」

「有里湊です。去年は何度も入院したおかげで出席日数が足りず留年してしまいました。とりあえず今は体調は安定しているので気を遣わなくても大丈夫です。部活は剣道と写真部を、あと同好会で服を作ったりしました。

これから一年よろしくお願いします。」

頭を下げるとクラスの人が拍手をしてくれた。こんな雰囲気これからしようとすることを考えると若干ためらいを感じるが、ここはやっておかないとまずい。この先生に対して低姿勢だと後々厄介なことになりそうだ。

それにやっぱりさっきの発言は許せない

「それと諸岡先生」

「何だ？」

諸岡先生は不機嫌そうに答えた。たぶん自己紹介が終わったと思っていたのだろう。実際クラスの人には不思議そうにしている。僕は一度深呼吸をしてはつきりと言ってやった。

「誰が落ち武者だ」

あなたの方がよっぽど落ち武者じゃないか。

痛いほどの静寂に教室中が包まれる。

「む…貴様の名は”腐ったミカン帳”に刻んでおくからな…」

諸岡先生は忌々しそうに言ってきた。あなたの方がよっぽど腐ったミカンっぽいと思うんだけどな。

「いいかね！」

ここは貴様がいままで居たイカガワシイ街とは違うからな。

いい気になって女子生徒に手を出したりイタズラするんじゃないぞ！

「…と言っても、最近は昔と違って、ここいらの子供もマセてるからねえ。」

どーせヒマさえあれば、ケータイで出会い系だの何だのと…」

諸岡先生の話が続いている…。なんか都会に対して偏見を持っているみたいだ。確かにそういった一面もあることは否定できないけど、教育者としてこの発言はどうなのだろうか？

すると緑のジャージを着た女子生徒が手を上げた。

「センサー。」

転校生の席、ここでいいですかー？」

女子生徒の指している席はその女の子の隣の席だった。具体的に言うと教室のほぼど真ん中の位置。何でそんな位置の席が空いているのだろうか？

「あ？そうか。」

よし、じゃあ貴様の席はあそこだ。

さっさと着席しろ！」

いちいち癪に障る言い方をする。本当にどうしてこんな人が教師をやっているのだろうか？

「アイツ、最悪でしょ。」

席に着くとジャージの女の子が話しかけてきた。

「うん、今日会ったばかりの人をこういうのはしたくないけど、あれはないね。」

「まー、このクラスになっちゃったのが運の尽き……1年間、頑張る。」

耳を澄まさなくても周りから噂声が聞こえる。この先生の前でこういったことは大丈夫なのだろうか？

「かわいそ、転校生来ていきなり”モロ組”か……」

「目エつけられると、停学とかリアルに食らうられるもんね……」

「ま、私ら同じクラスなんだから一緒なんだけどね……」

やっぱりいいつわさを聞かないな、諸岡先生は。

「静かにしろ、貴様ら！」

出席を取るから折り返し目正しく返事しろ！」

やっぱり怒られた。しかしクラスメイトの人たちは慣れてるのかすぐに静かになり、諸岡先生の言う通りの返事をしだした。

来年には僕もこうなっているのだろうか？ちよつと嫌な未来だな。

放課後になった。今日は年度初めということもあって、教科書の配布などで一日が終わった。

「では今日の所はここまで。」

明日から通常授業が始まるからな。」

諸岡先生が教室から出ようとすると放送が鳴った。

「先生方にお知らせします。」

ただいまより、緊急職員会議を行いますので

至急、職員室までお戻りください。

また、全校生徒は各自教室に戻り、

指示があるまでは勝手に下校しないでください。」

「うーむむ、いいか？」

指示が出るまで教室を出るなよ。」

何があったのだろうか？職員会議はともかく、生徒の下校を禁じるのはただ事ではない気がする。まあ、だからといって僕にはど

つすることもできないから教室で待機しているしかないんだけど。

比較的近くからパトカーのサイレンが聞こえる。事件だろうか？

「なんか事件？

すっげ近くね、サイレン？」

「クツソ、なんも見えねえ。

なんだよ、この霧。」

「最近、雨降った後とか、やけに出るよな。」

「そっぴや聞いた？例の女子アナ。

なんかパラッチとかもいるって。」

「ああ、山野真由美だろ？」

「商店街で見たやついるらしいぜ。」

「てか、俺聞いたんだけどさー……」

「マジかよ!？」

男子生徒の噂話が聞こえる。僕はただそれを聞いていた。流石に一日じゃあ僕みたいな性格の奴じゃあ友達はできない。

男子生徒は話をしているうちに何かに驚き、僕の前に座っている女子生徒に近づき話しかけてきた。

「あ、あのさ、天城。

ちょっと訊きたいことあるんだけど……

天城んちの旅館にさ、山野アナが泊まってるって、マジ？」

山野アナって確か昨日のニュースでやってた不倫問題の関係者だっけ？興味ないからあんまり詳しくは覚えてないんだけど。

「そついつの、答えられない。」

女子生徒（天城さんというらしい）は困ったように答えた。そりゃ旅館側には守秘義務があるだろうから答えられないだろう。それにしても旅館？天城さんの実家は旅館なのだろうか？

「あ、ああ、そりゃそつか。」

男子生徒はそついつと天城さんから離れて行った。

「はー、もう何コレ。」

いつまでかかんのかな。」

すると次はジャージの女の子が天城さんの隣にやってきた。

「さあね。」

天城さんはそつげなく答えるが、さっきの男子学生に対する対応よりも幾分柔らかかった。もしかしたらこの二人は友達同士なのかもしれない。

「放送鳴る前にソツコー帰ればよかった・・・

ね・・・そつ言えばさ、

前に話したやつ、やってみた？

ほら、雨の夜中に・・・つてやつ。」

「あ、ごめん。やってない。」

「ハハ、いいって、当然だし。」

「けど、隣の組の男子、”俺の運命の相手は
山野アナだー！”とか叫んでたって。」

前の二人は雑談に花を咲かせている。すると放送が鳴った。

「全校生徒にお知らせします。」

学区内で、事件が発生しました。

通学路に警察官が動員されています。

できるだけ保護者の方と連絡を取り、

落ち着いて、速やかに下校してください。

警察官の邪魔をせず、寄り道など

しないようにしてください。

繰り返し、お知らせします………」

物騒な話である。最初の放送の段階で何かあるとは思ったが、結構深刻な事態なのかもしれない。

もしかしたら昨日の堂島さんの呼び出しはこれに関係しているのだろうか？

「事件!?!」

「なになに、どういこと?」

「ね、見に行こうよ。」

「周りのみんなも騒然としている。」

とりあえず堂島さんに今から帰るとだけメールを打ち、帰るために立ち上がると、ジャージの女の子と天城さんが近づいてきた。

「あれ、帰り一人？」

「うん。流石にまだ友達もいないからね。」

「そっか。よかつたら、一緒に帰らない？」

「あー、あたし里中千枝ね。」

隣の席なのはしってるでしょ？」

「知ってる。諸岡先生の長話を中断してくれたよね。」

「よかった。覚えていてくれたんだ。」

「んじゃ、ヨロシク！」

「で、こっちが天城雪子ね。」

「あ、初めまして。なんか急でごめんね……」

「なんか天城さんは申し訳なさそうにしている。」

「のあ、謝らないでよ。あたし、失礼な人みたいじゃん。」

「ちょっと話聞きたいなーって、それだけだったば。」

「ああ、そういうことだったのか。転校先ではよくあることだ。転校生にそれまでの話を聞こうとするのは。ただ今回は僕の事情がのせいか、誰も話しかけてはこなかった。」

「いいよ、答えられることだったら何でも答えるよ。」

初めて会話をしたのが女子というのは若干悲しいものがあるが、クラスに打ち解けるにはこうやって誰かと会話をするのが一番いい。こういった積み重ねが人間関係を築くんだ。

ほんのちよつとの打算を含んで、僕はこの二人の女の子と帰るところになった。

教室から出ようと振り向くとそこにはなぜか顔色の悪い男子学生がいた。よくよく見れば彼は今朝急所を打ったあの学生じゃないだろうか。だとすればあの顔色にも納得がいく。まだ違和感があるのだろうか。

「あ、えーと、里中さん…」

これすげー面白かったです。技の繰り出しがさすが本場っーか…
…申し訳ない！事故なんだ！バイト代入るまで待つて！」

男子学生は里中さんにDVDを渡すと「じゃ」っと言い残し、その場から駆け足で出て行った。

すると、不審に思ったのだろうか里中さんは

「待てコラ！貸したDVDに何した？」

と言い走って男子学生を追いそして蹴り飛ばした。

男子学生は机に突っ込んでしまった。そしてまた股間を抑えている。もしかまた打ったのだろうか？

里中さんはそんな彼の様子は気にも留めずDVDを確認している。

「なんで！？信じられない！ひび入ってんじゃん…
あたしの“成龍伝説”があああ。」

聖龍伝説ってあのカンフー映画の？里中さんってそういうのが好きなのかな、あの悲しみようを見ると。

「俺のも割れそう…
つ、机のカドが、直に…」

それは痛い。僕はつい顔をしかめてしまった。

「だ、大丈夫？」

「ああ、天城…。心配してくれるのか？」

「いいよ、雪子。花村なんか、放っというて帰ろ。」

里中さんはかなりご機嫌ナナメのようだ。DVDをかばんにしま
うととっと帰ってしまった。さらに天城さんも里中さんについて
いってしまった。やっぱり女の子にはあの痛みは想像できないらし
い。

「ほらー、有里君も早くー。」

この花村君をどうにかしていきたいけどもう里中さん達は行っ
ちやったし、ついさっき里中さんと一緒に帰る約束をした手前約束を
破るようなまねはしたくない。花村君には悪いけどそっとしておく
ことにしよう。

「そんなんで大丈夫なの？」

「うん。今のところはね。」

校門の前まで僕が留年した原因について話していた。そのことを里中さんが聞いてきたとき、天城さんは失礼なことと思ったのか里中さんをたしなめたけど、僕は気にしなかった。実際、記憶がないからか去年のことはそこまで現実味を帯びた記憶がないのだ。宮本と汗を流したり、グルメキングと食べ歩きをしたり、そんな記憶は山ほどあるんだけど、大事な何かが足りないのだ。それが人なのか、物なのか、出来事なのかはわからない。だけどその何かのせいで僕は去年の事柄に関してはまるで物語の中の出来事のように感じてしまふのだ。

だから留年のことだってそこまで気にならないのだ。気になるとすれば、それは僕の記憶障害が留年に関係しているのかどうかぐらいいだ。

校門まで来ると、不意に一人の男子学生が校門の影から飛び出してきた。制服からして、この高校の人ではなさそうだ。

「キミさ、雪子だよな。こ、これからどっか、遊びに行かない？」

「え…だ、誰？」

雪子と呼び捨てにしてたから親しい仲なのかと思ったが、どうや

ら違つようだ。

「なにアイツ。どこのガッコ？」

「よりによつて、天城狙いかよ。てか、普通は一人ん時に誘うだろ…」

後ろから男の声がする。たぶん目の前の男子学生は天城さんをナンパしに来たんだらう。それは天城さんの容姿からしたらそう不思議なことではない。問題は後ろの男子学生の言うとおり天城さんが里中さんと、僕との3人でいるときにナンパしようとしていることだらう。そして彼の学校ではさつさと帰れと言われなかったのだから？ いや、もっと彼の通っている高校が遠くにあるのなら、警察からの通達が来る前に帰っていたのかもしれない。だがまあ、パトカーのサイレンがついさつきたくさん聞こえていたのに、遊びに行こうと誘うのはどうなのだらうか？

「張り倒されるにオレ、リボンシトロン一本な。」

「賭けにならねって。“天城越え”の難易度しらねえのか？」

「あ、あのさ。行くの？行かないの？どっち？」

まだ後ろから話が聞こえるなかなンパを続けるとは。泣き黒子といい、この状況でのナンパといい、彼を彷彿と…

誰だ？彼って。昨日もそうだが、ここにきてから忘れてしまった誰かをよく思い出す。そして思い出すんじゃない、と言わんばかりに思い出そうとするたびに頭痛がする。

そして、思い出そうとするのをやめると霧が晴れるがごとく、意識がクリアになり、頭痛も止む。

「あ、あの人、何の用事だったんだろ…」

気がつくと、ナンパしていたやつはいなくなっていた。天城さんの発言からきつとだめだったんだろうけど…

それにしても天城さんは自分がナンパされていたと気づいてないんだろうか？

「何の用って、デートのお誘いでしょ、どう見たって。」

「そつだと思つよ。」

里中さんがこつちを見てきて同意を求めてきたので里中さんの意見を肯定する。あれはどう見てもデートの誘いだった。

「え、そつなの…?」

本気で驚く天城さん。驚きたいのはあなたの認識について何だけど。

「そつなのって…」

あーあ…」

里中さんもあきれ返っている。

「まあけど、あれはないよねー」

いきなり“雪子”って怖すぎ。」

「そつだよね。普通お互いに知り合っていないなら名字で呼ぶよね。」

やっぱり女の子の視点から見てもあの方法は拙いものだったよ
うだ。普通こつちにとって初対面の人に名前と呼ばれるのはあまり気
がいいものではない。

「よう、天城。」

また悩める男子フツたのか？」

校門からマウンテンバイクを押しした花村君が天城さんに話しかけ
てきた。どうやら痛みはある程度引いてきたらしい。

「まったく罪作りだな…」

俺も去年、バツサリ斬られたもんなあ。」

「別にそんなことしてないよ？」

なんか二人の会話がかみ合っていない。少なくとも花村君が遊びに
誘って断られたことは事実のはずだ。もしかして天城さん、さっき
みたいに花村君のこと勘違いしてるんじゃない。

「え、マジで？」

じゃあ今度、一緒にどっか出かける？」

「それは嫌だけど…」

「僕かでも期待した俺がバカだったよ。」

持ち上げて落とす。(おそらくだが)天城さんは無意識のうちに
とんでもないことをしている。彼女は天然なのだろう。

「つーか、お前ら、あんま転校生をいじめんなよー。」

「話聞くだけだつてば！」

花村君はそう言い残しマウンテンバイクで下り坂を下りて行った。そして里中さんはちよつと怒ってる。転校生は質問攻めにあうことが多いからそのことを差しているのだろつけど、どうやら里中さんは言葉通りにとらえているみたいだ。

「あ、あの、ごめんね、いきなり……」

「別に気にしてないよ。」

実際僕には何の被害もなかったのだからそんな謝ることもないと思つた。

「ほら、もう行く。何か注目されてるし。」

里中さんに言われて気づいたが、周りには野次馬がたくさんいた。なんとなく見に来る気持ちはわかるけど、こつも見られるのは性に合わない。僕と天城さんは顔を見合わせると、里中さんを追つことにした。

「そつか、親の仕事の都合なんだ。もつとしんどい理由かと思つちやつた、はは。」

「流石に風邪とかで出席日数が足りなくなつたやつに一人暮らしはさせないって言われてね。理由なんて そんなもんだよ。」

それは嘘だ。僕があこの町に居れなくなった理由は別にある。でもそれは思いつきり重い内容だし、今日会った人に言う内容じゃない。

「ここ、ほんつと、なーんもないでしょ？そこがいいところもあるんだけど、余所の人に言えるようなものなんてもんは全然…」

あ、八十神社からとれる…何だっけ、染め物とか焼きものとか、ちよつと有名な。

ああ、あと、雪子ん家の“天城屋旅館”は普通に自慢の名所！」

「え、別に…古いだけだよ。」

「“隠れ家温泉”とかって雑誌とかにもよく載ってんじゃん。

この町で一番立派な老舗旅館でね、雪子はその、時期女将なんだ。

雪子んち目当ての観光客とかも来るし、この町それで保ってるんだよね、実際。」

「すごいね」

本当にすごいと思う。下手に都会な街とかよりも全然すごいんじゃないだろうか？里中さんの言い分は若干誇張表現が入ってるんだろうけど、まるつきりウソってわけじゃないだろう。

「…そんなことないけど。」

しかし天城さんは若干嫌そうな返事だった。もしかしたら家業に

対して何か思うところがあるのかもしれない。

「ね、ところでさ、雪子って美人だと思わない？」

何かと思えば何とも答えにくい質問が来た。さっきナンパがあつて今こんなことを聞くだろうか？確かに天城さんは奇麗だとは思つけど、転校初日の僕に対してするような質問だろうか？

「うん、奇麗だと思うよ。」

どう答えても正しい気がしないからとりあえず正直に言うことにした。

「でしょ！」

「ちょっと、またそういうこと……」

どうやら里中さんは純粹に天城さんが奇麗ということを自慢しただけのようだ。それに対し、天城さんはちよつと里中さんの発言に対して迷惑そうだ。『また』ということは以前にもこういうことがあつたのだろう。

「学校でもすごいモテんのにさ、彼氏ゼロ。おかしくない？」

いや、そんなこと言われても。

「や、やめてよいきなり。」

ぜ、全部ウソだからね。モテるとか、彼氏ゼロとか！

天城さんは顔を真っ赤にして否定する。いや、彼氏がいるならと

もかく彼氏ゼロじゃないってのは違つてしょ。

「あ、違つた。えっと違つから！彼氏とかいらないし！」

「わかつたから落ち着いて。」

天城さんの言い分はわかつたので天城さんを落ち着かせる。

すると天城さんはばつの悪そうな顔をして里中さんに文句を言つてた。

「ははは、ごーめんごめん。だつて折角なのに、ノリ悪いんだもん。」

確かに学校を出てここまでじゃべつてるのはほとんど里中さんで、それに僕が答えるくらいだった。だからってこんな振りはしなくてもいいと思うんだけど。

「あれ、何だろ。」

里中さんは前に何か見つけたのか歩くスピードを速めた。その里中さんについていくと、交差点のあたりでパトカーと、主婦らしき人たちが数人たむろしていた。そこから噂話が聞こえる。

「でね、その高校生の子、ちょうど早退したんですつて。」

「まさかアンテナに引っかけかかっているなんて思わないわよねえ。」

「見たかつたわあ。」

「遅いんだから。ついさっき、警察と消防団で降ろしちゃつたのよ。」

「お。」

「怖いわねえ。こんな近くで死体なんて…。」

死体！？しかもアンテナに引つかかっていたって…

「え…今何て？死体！？」

里中さんは驚いて放心している。天城さんも似たような感じだ。僕だつて落ち着いているように見えるかもしれないけど、頭の中は混乱している。実際、僕は交差点から出てきた堂島さんに呼ばれるまで立ちすくんでいた。

「おい、ここで何している。」

「えっ、ええ。ただの通りすがりです。この二人と一緒に学校から帰っているところでした。」

僕主観でいきなり現れた堂島さんの質問に答えると、堂島さんは

「ああ…まあ、そうだろうな。」

「たたく、あの校長、ここは通すなって言っただろうが…」

などどつぶやいていた。

どうやら本来ここは通行止めだったようだ。確かについさっきまで誰かの死体がココにあったのだ。高校生が来るべき所じゃないだろう。

「ねえ、知り合い？」

話に入ってこれない里中さんが僕に堂島さんについて聞いてきた。事件現場にいる刑事っぽい人と親しそうに話している僕が不思議だったのだろう。

「うん。えーとね…」

「こいつの保護者の堂島だ。」

あー、まあその、仲良くしてやってくれ。」

僕が何と答えようか迷っていると堂島さんが助け船を出してくれた。まだ二日目ということもあってどう紹介したらいいのか迷う時がある。これからは今の堂島さんの対応と同じようにしよう。

「とにかく三人とも、ウロウロしてないでさっさと帰れ。」

堂島さんの言うとおりにこの場から立ち去ろうとしたら、交差点から若いスーツを着た男性が飛び出してきた。その男性は一気に田んぼの淵まで行き吐いている。何かやばいものを見たのだろうか？もしかしたらこの人も刑事で話に出てる死体を見たのかもしれない。

「足立！おめえはいつまで新米気分だ！今すぐ本庁に帰るか？ああ！？」

そんな様子を見た堂島さんが怒っている。もし、死体を見てしまったのなら、この反応は当然のようにも感じるが、それではこの仕事は務まらないのだろう。社会人というのは大変そうだ。

「す…すみませ…うつぶ。」

「たあく…顔洗ってこい。すぐに地取り出るぞ。」

堂島さんが交差点に戻って行ってちょっとして、まだ顔を青ざめている足立さんとやはら駆け足で堂島さんについて行った。

「さっきの校内放送って、これのこと？」

「たぶんそうじゃないかな。堂島さん、校長先生のこと行ってたし。」

里中さんの疑問に答える。こうして誰かと話してないとどうにかなってしまうそうだ。両親が死んでから、どうしてもこういう人の死に関する話題は苦手だ。自分に直接関係のない人のことでもどうしても心がざわめいてしまう。

「アンテナに引っかかってたって、どういうこと何だろう？」

天城さんの疑問には答えられなかった。たぶん言葉のとおりなんだろうけど、そうだとしたら余計にどういふことが分からなくなる。

「ねえ、雪子さ、ジュネスによつて帰ん、のまたにしようか…」

里中さんは少し考え込んだかと思うと、天城さんに向かってそんなことを言い出した。僕には直接は関係ない話題だが、里中さんの提案には賛成だ。もしもこれが殺人事件なら、絶対に早く家に帰った方がいい。

「うん…」

どうやら天城さんも同じ意見のようだ。声色にもどこか元気がない。

「じゃ、私たちここでね。明日からがんばろ、お隣さん。」

「うん、それじゃあまた明日。」

「また明日。」

里中さんと天城さんはここまでのようので今日はここで別れることになった。天城さんと里中さんはもう行ってしまい、僕にも今日はやることもない。このまままっすぐ帰ろう。

夜、菜々子ちゃんとコンビニのお弁当を食べて、一緒にテレビを見る。今日は食事中菜々子ちゃんと会話はなかった。堂島さんのことが気になるのかそれとも僕が怖いのか、できれば前者であって欲しいのだが…。

「お父さん、今日も帰ってこないのかな…」

テレビが他愛ないニュースを流していると、菜々子ちゃんがそう呟いた。やっぱり堂島さんが気になっているのだろう。今日はしきりにパトカーが走っていた。そのことから堂島さんが何か事件に関わっていると感じているのかもしれない。

次に、静かな郊外の町で不気味な事件が発生しました。本日正午頃、稲羽市の鮫川付近で女性の遺体が発見されました。遺体で見されたのは、地元テレビ局のアナウンサー、山野真由美さん、27歳です。

稲羽警察署の話によりますと…

テレビが新しいニュースを流す。映っている風景からは今日堂島さんと会った辺りということが分かる。

「いなばけーさつ！

お父さんのはたらいてるところだ！」

菜々子ちゃんは驚いている。ある程度予想はしていたがやっぱり堂島さんはこの事件の捜査に関わっているようだ。

「菜々子ちゃん、お父さんが心配？」

「…うつん、おシゴトだから、しかたないよ。」

遺体は民家の屋根の大型のテレビアンテナに引っ掛かったような状態で発見されました。なぜこのような異常な状態で引っ掛かったのかは、現在のところ分っていないとのこと。死因も今のところ不明で、警察では、事件と事故の両面から捜査を進めることにしています。ただ周辺には、地域特有の濃い霧が出ており、本格的な現場検証は明日になる見込みです。

山野アナ：確か昨日のニュースでやってた地元議員秘書との不倫騒動で話際が上がってた人だ。もしもこれが事件なら大変そうだな。堂島さんは大丈夫だろうか？

「やねの上でみつかったの？なんか、こわいね…」

「そうだね。」

菜々子ちゃんはニュースを聞き怯えているようだ。確かにお父さんがこんな怖い事件の捜査をしているのかもしれないのなら怖く思うだろう。今の僕では菜々子ちゃんの気を紛らわすようなことはできない。それがちょっと、悔しかった。

いつの間にかニュースは終わり、CMになっていた。テレビにはジュネスが映っている。僕はあまり行ったことはないけど、いいところだと評判のデパートである。そういえば今日里中さんと天城さんも寄ろうとしてたっけ。

「あ、ジュネスだ。」

菜々子ちゃんはジュネスのCMが始まるや否やうつむき加減だった表情を一変させ、花の咲いたような笑顔になった。ジュネスのCMはなんかこう、耳に残るCMだ。それはCMとして正しいし、だからこそ顧客も集まるのだろう。そして最後のキャッチフレーズ、小さな子にもまねできるものだからか評判がいい。

「エブリデイ・ヤングライフ！ジュネス！」

案の定、菜々子ちゃんもまねをしていた。確か昨日もやっていた。よほど好きなのだろう、満面の笑みで体を揺らして振り付けをしなから歌ってる。

そして菜々子ちゃんは何かを期待する目で見ている…。これは僕にもやってほしいのだろうか？それはちょっと難易度が高い。僕は特別ジュネスが好きというわけではないし、振り付けもよく知らない。しかたないからジュネスについて菜々子ちゃんに聞くとするか…

「菜々子ちゃん、ジュネスが好きなの？」

「うん、学校でもはやってるんだよ。」

菜々子ちゃん嬉しそうに答えてくれた。そしてまだ繰り返しジュネスのCMのまねをしている。どうやら怖い話は忘れたようだ。

ジュネスのCMのおかげで菜々子ちゃんの気が紛れたようだ。明日からは通常の授業がある。だからちょっと早いけど、菜々子ちゃんと同じぐらいの時間に今日は寝ることにした。まだ学校で友達はできていないが、いい高校だった。今日はちょっと不安だったけど、明日からは学校に行くのが楽しみになりそうだ（諸岡先生のこととは除く）。

今日の事件がちょっと気になるが、一高校生の僕が事件のことを気にしていてもしかたない。そういうのは堂島さん達に任せよう。

八十稲羽ではついに謎という名の霧が降り、僕の中に広がる霧は

自覚できないほどだが、薄くなった。記憶には残らない一面の霧
の中での二つの影との邂逅。

これら霧はいつになったら晴れるのだろうか？

霧は未だ、晴れる気配を見せない…

第二話 4月12日(火) (後書き)

ちよつと長くなってしまいました。2日目が終わりました。戦闘開始までが長い…

あと蛇足ですが、急所を打つと(打たれると)とんでもなく痛い。経験者が言うんだから間違いない。

第三話 4月13日(水) (前書き)

実習のおかげで投稿が遅くなってしまいました。3週間ぶりの投稿ですが、第3話になります。

第三話 4月13日(水)

一面の霧の中で 第3話

朝登校していると、後ろから自転車が猛スピードで通り抜けていき、そしてそのままゴミ捨て場に突貫した。よく見てみたら昨日危険行為をして電柱にぶつかった彼のようだ。たしか花村君といったか、彼はポリバケツに頭を突っ込みジタバタしている。助けを求めているようなので、彼をポリバケツから抜くことにした。

「いや、助かったわ。ありがとな！えっと…そう、転校生の有里湊だったよな。」

俺、花村陽介。よろしくな。」

「うん、こっちこそよろしく。ところでケガはない？」

あんなスピードでぶつかったんだ。どこかケガをしてるかもしれない。

「へーき、へーき」

「どうやら花村君は無事のようだ。」

「な、昨日の事件、知ってんだろ。“女子アナがアンテナに”ってやつ。」

「あれ、なんかの見せしめとかかな？事故なわけないよな、あんなの。」

「事故ではないとは思っけど、まだ何とも言えないね。あの行為にどんな意味があるのかなんてわからないし。」

「わざわざ屋根の上にぶら下げるとか、マトモじゃないよな。つか、殺してる時点でマトモじゃないか。」

「そうだね。」

僕は顔をしかめながら答える。当然だが僕にはどうして人を殺すようなまねをするのかが分らない。『死』というのは恐ろしいものだ。両親を失ったあの日、僕はそれを経験している。命あるものは全ていずれ死ぬということはわかっているけど、それを誰かの手で他人にもたらすなど決してあつてはならないものと考えてる。

「やつべ遅刻！」

花村君が時計を見るとそんなことを言った。僕も急いで自分の時計を確認したが、ちよつと危ないかもしれない…

「後ろ乗ってくか？ちよつとギコギコいってるけど。」

「やめとく、そんなチャリで二人乗りしたらまた昨日みたいに電柱

にぶつかっちゃうよ。」

僕も急所は打ちたくない。

「うっ、見てたのかよ…」

「だけどそんなに走れるか？」

昨日の失態が恥ずかしいのか花村君は苦笑いだ。

「これでも足と体力には自信があるんだ。」

ぱんぱんと足をたたいて軽く走るふりをする。去年散々宮本のラニンングに付き合わされたんだ。嫌でも体力はつくさ。

「オツケー。じゃあ行こうぜ。」

花村君がギコギコいつてる自転車をこぎ、僕はその背中を追って走り出した。

授業は全く問題なかった。悪かったのは出席日数だけで学力は問題ないんだ。確かに忘れている部分もあったが、それはちよっと予習すれば思い出す程度のことだ。もっともだからと言って慢心するつもりはないが。

「どうよ、この町にはもう慣れた？」

放課後になり、花村君がはなしかけてきた。今朝の件以降、休み時間などにもいろいろと話しかけてくれる。きつと面倒見のいい人なのだろう。

「まだ慣れてないよ。転校自体は慣れてるんだけどね。」

今までは都会を転々としてきたからこの町はちょっと新鮮だ。

「まあ、来たばっかだしな。」

「こっつて、都会に比べりゃ何も無いけどさ、逆に“何も無い”がある…っつの？」

「そうだね。都会って何もかも詰め込み過ぎな感じがするよね。」

「だろ。ここはさ、空気とか結構うまいし、あと食いもんとか…」

「あ、ここの名物知ってるか？」

「いや、知らない。」

昨日聞いたのは確か染め物と焼きものだったっけ。食べ物では何があるんだろうか？

「“ビフテキ”だけ。すごいっしょ、野暮ったい響き。」

「ビフテキねえ…名前は聞いたことあるけど実際に食べたことはないかな。」

「そうなのか？俺安いとこ知ってるんだけど、行くか？今朝助けてくれたお礼におごるぜ。」

「そんなお礼とかいいよ。そういうの抜きにして行かない？花村君、昨日のDVDの件で金欠なんじゃないの？」

「うっ。」

言葉に詰まる花村君。まあDVDは高いからね。そして教室の前の方から里中さんがやってきた。

「そーよ、あたしのDVDが先でしょ。それに、あたしにはお詫びとかそーゆーのないわけ？」

どうやら里中さんは僕たちの話を聞いてたみたいだ。確かに花村君は里中さんに何かしらお詫びをした方がいいだろう。里中さんは結構根に持っているみたいだ。

「ぐっ、メシの話になると来るなお前…。」

「雪子もどう？一緒に奢ってもらお。」

あ、里中さんがひどいことをしようとしている。花村君もなんか焦ってるみたいだし。というかそんなことしたらDVDの弁償に余計に時間かかっちゃうんじゃない…

「いいよ、太っちゃんし。それに、家の手伝いあるから。」

断る天城さん。花村君の財布へのダメージは軽減されたようだ。

「天城つてもう、女将修行とかやってんの？」

「そんな、修行なんて。忙しいとき、ちょっと手伝ってるだけ。それじゃあ私行くね。」

そういうと天城さんは帰って行った。ただ何だろう？実家のことを話しているときの天城さんの様子がちょっと気になるかな。前にもあんな感じに人を見たことあるような…。

それはいったいどんな人だったのか。思い出そうとすると相変わらず頭痛がする。もいい加減慣れてきたがやっぱり気になる。僕は今天城さんを通して誰を見ていて、そこから何を想像しようとしていたのか。

「仕方ないか。あたしたちも行く。」

「ええ、まじ二人分おごる流れ…？」

「ホントに来るんだね…」

花村君、ご愁傷様。

「安い店ってここかよ…」

「ここビフテキなんて無いじゃんよ。」

ちなみに今いるのは花村君に連れてきてもらったジュネスのフードコート。花村君は3人分の食べ物を買ってきてくれてる。別れ際

に僕の分のお金を渡しておいたら一瞬驚いた風になったが、ちゃんと受け取ってくれた。

こう言うっては何だが、里中さんはどうしてこう、ビフテキにこだわるのだろうか？学校帰りに食べるんだからビフテキなんかよりこいういうファストフードの方があってる気がするんだけど。

「お前にもおごんなら、あっちのステーキハウスは無理だったの。」

「いや、だから別に奢ってもらわなくても「だからって自分んち連れてくることないでしょーが。」いいんだけど…」

だめだ、僕の話聞いてもらえない。というかこの二人仲良すぎじゃないか？つきあってるとかそういう雰囲気はないが、仲の良い友達というような感じはする。というか…

「ん？自分んち？ジユネスが？」

「別に俺んちって訳じゃねーよ。まだお前には言っただけさ、俺も都会から引越してきたんだよ。半年ぐらい前にな。」

親父が新しくできたここの店長になることになってさ。んで、家族で来たってわけ。」

「それじゃあ花村君も転校生だったんだ。」

「そうだよ。ま、それはさておき、歓迎の乾杯といきますか。」

「そうだね。」

僕はトレイから紙コップを取った。

「里中のはおごりだぞ。」

花村君は「のは」の部分に力を入れて里中さんの方を向いてジュースを進めた。

「うん、知ってる。」

里中さんは花村君のいやみに対して何の反応もなく紙コップを取った。今のいやみを気にしてないのか、それとも気付いていないのか…非常に判断が難しい。まあそんなことどうでもいいか。

「それじゃあ、有里湊君の八十稻羽への引越しを祝ってカンパイ。」

「カンパイ」

花村君の音頭で乾杯をした。飲んだジュースの味は平凡なものだったが、どこか心が満たされたような気がした。

陽介（花村君にこう呼ぶように言われた）と里中さんとの会話はまさに平凡なものだった。好きな食べ物、好きな歌手、この町のお店の話、そんなことぐらいだ。

そして今、僕の目の前にはなぜか陽介の意中の女性こいつ小西先輩が立っている。先ほど陽介が小西先輩を見つけて席を立ててからはなる

べく意識を向けないようにしていた。どうも恋愛事は苦手だし、あまり興味もない。だから里中さんの解説を聞いてからどんなことを陽介が話していたのか分からない。ただ、「転校生」という単語が陽介の行った方から偶然聞こえてきたから振り向いたら目の前に例の小西先輩が立っていた。どういう話の流れでこうなったのか分からないが、どうでもいい。今気になるのはなぜこの人は僕を品定めしているのかだ。

「ふーん、キミが噂の一つダブってる転校生？」

「そうですね。」

若干ぶつきらぼうに答える。事実なのだから仕方がないのだが、初対面の人にいきなりこんなことを言われて友好的な態度にはならない。

「ああゴメンゴメン。なんか『転校生』と『留年』をセットで憶えちゃってね。私のことはもう聞いているかな？年は君と同じだから丁寧に話す必要はないよ。」

小西さんは軽く頭を下げた。

「別に気にしてないですよ。それと話し方はこれが普通なんです。」

女子と大人に対してだけだけど。

「都会つ子同士は、やっぱり気が合う？花ちゃんが友達連れてくるのって珍しいんだよ。」

「そうなの、陽介？」

花ちゃんについては触れないで上げよう。

「べ、別にそんなことないよー。」

本当みたいだ。それにしても花村、ちょっと僕に対しての視線にとげがあるんだけど。

「こいつ、友達少ないからさ。仲良くしてやってね。あ、でも花ちゃんお節介でイヤツだけど、ウザかったらウザいって言いなよ。」

ここはちよつと陽介に援護射撃をしてあげるか…

「陽介はイヤツですよ。これまで多くの人を見てきたんで、イヤツはなんとなくわかるんですよ。」

笑いながら小西さんに返す。

これは事実だ。悪い奴は初対面の印象では分らないやつが多いけど、イヤツってのはどこか心で感じるんだ。これでも高校生になつてからはイヤツと思ったやつが悪い奴だったことはない。

そして陽介はイヤツだと思う。理屈なんて無い。僕がそう思ったんだ。

「あははっ。分ってるって、冗談だよー。」

「せ、先輩。変な心配しないでよ。」

「さーて、こっちはもう休憩終わり。やれやれっと。それじゃあね。」

「あ、先輩……」

小西さんは席を立つとフードコート奥の方に歩いて行った。

「ははっ、人のこと“ウザいだろ”とかって、小西先輩の方がお節介じゃんな？」

あの人弟いるもんだから、俺のことも割とそんな扱いというか……」

「弟扱い、不満って事？…ふーん、分かった。やっぱりそーゆー事ネ。」

地元の老舗酒屋の娘と、デパート店長の息子。…燃え上がる禁断の恋、的な。」

「あのね、里中さん。何でもかんでもそんな週刊誌っぽく言う必要はないでしょ。」

「そ、そーだよ。だいたい、そんなじゃないんだよ。」

「大体陽介と小西さんがくつついたからといっても、別に禁断でも何でもないでしょ。」

「うおーい、だから違うって言うてんだろ湊！」

陽介は必死になって否定しているが、ばればれである。多分陽介は気が付いてないんだろうけど、さっき小西さんと話していた陽介は本当に楽しそうだったし、何より顔が赤くなってたんだ。あんなんじゃ昨日会ったばかりの僕でだってわかる。

「そつだ、悩める花村に、イイコト教えてあげる。」

僕に食いかかってきた陽介は里中さんのニヤケた声が気になったのか、里中さんの方を向いた。僕はもとの席の位置的に里中さんの方を向いていたので、2人とも里中さんの方を向く形になった。

「マヨナカテレビ”って知ってる？」

「マヨナカテレビ”？」

はじめて聴く単語について聞き返してしまった。

「そう、雨の日の午前0時に、消えているテレビを一人で見るの。で、画面に映る自分の顔を見つめてっていると、別の人間がそこに映ってる…ってやつ。」

それ、運命の相手なんだってよ。」

いわゆるこの街の都市伝説ってやつか。そりゃ聞いたことないわけだ。

「なんだそりゃ？」

何言いだすかと思えば…

お前、よくそんな幼稚なネタでいちいち盛り上がれんな。」

「よ、幼稚って言った？」

信じてないんでしょ!？」

陽介は呆れているが、里中さんはこの“マヨナカテレビ”ってやつを信じてるらしく、陽介に対してちょっときつい口調で言い返してた。

「信じるわけね だろが！」

おい、湊はどうだ？こんな信じないよな。」

「そんなことないよ、信じてくれるよね。」

まあこういう場合は第三者の意見を聞くよね…

この場合、どっちを支持してももう片方から恨まれそうでいやな
んだけど、

「結論から言えば信じられない…かな。」

「そーだよな。」

同じ意見で喜ぶ陽介。

「えー何だよ。」

納得のいってない里中さん。

「“マヨナカテレビ”に自分以外の誰かが映るっていうのはいいんだ。そういうミステリーな事があってもそんなことは別にどうでもいいんだ。」

「いや、どうでもいいって。そこは大事だろ。」

「でもね、陽介。今、ミステリーって言葉を使ったけど、寝ぼけていたとか後ろの壁に貼ってあったポスターやカレンダーが画面に映ってたとかいろいろ理由は考えられるんだ。」

「まあ、そりゃあな。」

「でも今その真相は分からない。そういう意味を込めてmistery:不思議、謎って言葉を使ったんだ。

けどね、その先。映った人が運命の人っていうのが僕には信じられない。いや、信じられないっていうよりは気に食わないって言った方が正しいかな。」

「気に食わない？」

「うん里中さん。運命って言葉を丸ごと否定するつもりはないんだけど、事この事柄に関しては否定したいね。」

「どーしてよ。」

「基本的に恋愛事には興味はないんだけど、あらかじめ自分が結ばれる相手が決まってるってなんか嫌じゃない？好きな女性と結ばれたのも結ばれなかったのもそんなの最初っから決まってる事なんだからっていうのは僕はいやだな。」

「まあ、分からなくはないけど…」

「だからね、里中さん。僕の場合は理屈がどうこうといった話じゃなくて、ただこの“マヨナカテレビ”に映った人と結ばれる的な話があまり好きじゃないから信じないだけなんだよ。」

里中さんは口をとがらせている。僕の話はいろいろな理屈つけてはみたが、結局は感情論なのだ。

ただ補足するなら、個人的には運命の相手どうこうの話はきつとテレビに好きな人が映ってそれを「これはきつと運命の相手なんだ。」と勘違いしたのが始まりのような気がする。

こういう都市伝説って出だしがどこで、どういう過程を経て今現

在の形になったのかがいまいち分かりづらいから殆どが予想にすぎないんだけど…

「だったらさ、ちょうど今晚雨だし、みんなでやってみようよ。」

何か考え込んでいるかと思えば里中さん、そうきたか。

「やってみようって…」

オメ、自分でも見た事ねえのかよ！久し振りにアホくさい話を聞いたぞ…」

「まあ、都市伝説みたいなものらしいし、やった事なくても仕方ないんじゃないかな？」

女の子はこういうの好きそうだけど、それでも全員がやるわけじゃない。そういう意味ではごく普通の事じゃないかなとも思う。

「それよりさ、昨日のアレって、やっぱり“殺人”なのかね？実はその辺に犯人とか居たりしてな…ひひひ。」

「いや、陽介。そこで笑うのはどうかと思うけど…」

「冗談と分かかっていてもたちが悪い。」

「そういうの面白がんなっての
幼稚はどっちだよ…」

それより、とにかく今晚試してみてよね。」

まあ全く興味がないわけじゃあないし、やるだけやってみようかな。

夕方、今日も堂島さんは夕食時になつても帰つてこない。仕方ないから今日も菜々子ちゃんと二人っきりの夕食だ。惣菜をテーブルに並べて夕食を食べる。菜々子ちゃんはうつむいたままだ。

「菜々子ちゃん、堂島さんから連絡はあつた？」

「ない。デンワするって、いつも言ってるのに。」

食卓を沈黙が支配する。去年舞子ちゃんと一緒に遊んだ時にも思つたことだけど、小さい女の子と何かするっていうのは難しい。舞子ちゃんは時たま遊ぶぐらいで、それに舞子ちゃん自身が積極的に話しかけてくれたけど、菜々子ちゃんは違う。今は菜々子ちゃんと家族関係にあつて、菜々子ちゃん自身あまり話しかけるタイプには見えない。実際、会話といえるものはここ三日間で数えるぐらいしかない。他力本願だなと思いつつも、僕は堂島さんから連絡が来るのを待ちつつただ黙々とご飯を食べていた。

不意に戸が開かれる音がした。すると菜々子ちゃんは今までうつむかせていた顔を上げて笑顔になった。

「やれやれ…」

「ただいま、何か変わりはなかったか？」

堂島さんは疲れているようだ。声色に覇気がない。

「はい、特には何も。それとおかえりなさい、お疲れ様。」

「ない、かえってくるの、おそい。」

「悪い悪い…仕事が忙しいんだよ。」

きつと一昨日の殺人事件がらみなのだろう。今日も学校帰りに何名かの警察官を見た。こういうのは初動が大事とドラマか何かで見た気がする。それが本当なら明日ぐらいまでこの忙しさは続くんじゃないだろうか？

「テレビ、ニュースにしてくれ。」

堂島さんはテレビ正面に鎮座しているソファに座りこむとニュースをつけるように頼んできた。僕は構わないが、菜々子ちゃんは若干不満のよう口をとがらせている。

次は、霧に煙る町で起きたあの事件の続報です。稲羽市でアナウンサーの山野真由美さんが民家の屋根で変死体となって見つかった事件。山野さんは生前、歌手の柊みすずさんの夫で議員秘書の生田目太郎氏と愛人関係にあった事が分かっています。警察では、背後関係を更に調べるとともに、関係者への事情聴取を進める方針です。番組では遺体発見者となった地元の学生に独自でインタビューを行いました。

「ふう…第一発見者のインタビューだ？どこから掴んでんだ、まったく…」

まあ情報は漏れるものと僕は思ってるけど、実際警察という組織からしたら好ましい事態ではないんだろう。

それよりも問題はこのレポーターだ。はつきり言ってみていて気分が悪くなる。インタビューを受ける人の気持ちを考えているのだろうか？

よくよく見るとこの第一発見者は小西さんじゃないだろうか？今日初めて会った人とはいえ、知り合いがこんな人に絡まれている絵はあまり見たくない。

そんなことを考えていると不快なインタビューは終わった。これでもう不快な気分にはならないだろう…

正直言つてその後のニュースはあまりいいものとはいえなかった。豪島さんもいろいろ突っ込んでいたが最後の方は無視しているようだった。

ニュースが終わると、菜々子ちゃんの好きなジュネスのCMが流れた。

「エヴリデイ・ヤングライフ・ジュネス！」

菜々子ちゃんはそのCMを見るとたちまち笑顔になった。ちょっと嫌な気分だったので菜々子ちゃんの笑顔には癒される。

「ねえ…お父さん。こんどみんなでジュネス行きたい。」

「ジュネスか。僕もあんまり行ったことないから行ってみたいかな。」

「ほんと!？」

「うん。堂島さんはどうかな？」

ジュネスには今日陽介と里中さんと行ったぐらい。どんな所なのか実際によく見てみたいし、ジュネスなら菜々子ちゃんとももっと仲良くなれそうな気がする。

それにしても堂島さんはどうしたのだろうか？確かに積極的に話に入ってくるような感じには見えないけど、今回の件は堂島さんにも絡んでくる。

「……………」

「…だめ？」

反応のない堂島さんに菜々子ちゃんは不安そうに再度聞いた。

「菜々子ちゃん、堂島さん寝てるみたいだよ。」

いびきが聞こえる。どうやらかなり疲れているみたいだ。帰って

きてからも声に覇気がなかった。やはり今回の事件の捜査は相当困難なのだろう。

「あーあ、もー」

菜々子ちゃんは残念そうにつぶやいた。

「菜々子ちゃん、きっと今のは聞こえてなかっただろうからまた今度一緒にジュネス行こうって頼もうか。」

「いいの?」

おずおずと菜々子ちゃんは聞き返してきた。僕に遠慮しているのだろうか?

「いいよ。僕もジュネスに皆で行きたいからね。」

「うん、ありがとう。」

菜々子ちゃんは満面の笑顔でうなずいてくれた。この笑顔を見ただけでもこの提案をしてよかったと思えるぐらい、気持ちのいい笑顔だった。

時刻は午後11時55分。里中さんとの約束を果たすため部屋を暗くして自室のテレビの前にあるソファに座る。

正直言って“マヨナカテレビ”のことは全然信じてない。最近見たあのよくわからない占いの夢はなぜか信じてしまったが、基本オカルト関係は信じてない。それでも明日里中さんに追及された時のため一応試しておくことにした。

今日はちょうど雨が降っていて“マヨナカテレビ”の条件は満たしている。さてあと少ししたら何が映るのか…

雨の降る音のする中、何も映らないテレビを見て苦笑いをする。どうやら少しは期待していたようだ。特にすることもなかったので明日に備えてもう寝よう、そう思った時だった。電源が落ちているはずのテレビに光が灯ったのは。

砂嵐の中、時たま何かが映る。それが何かなど今の僕には気をも向けることなどできない。頭痛がする。去年のことを思い出そうとするたびに来るようなあの頭痛が来る。

汝八我、我八汝

声が聞こえる。いつか聞いたものとは違うが、懐かしくも心のどこかで恐怖心が蘇る、そんな声が聞こえる。

汝、再び扉ヲ開ケシ者ヨ

外では雷が鳴っている。断片的に入ってくる視覚情報でのみそれを認識できる。

頭が痛い、心臓が破裂する。

そんな無限にも思える時間は一際大きな雷光とともに終わりを告げた。

息が切れ、動悸がする。気が付けば額には脂汗も浮かんでいる。時計を見るとほとんど時間は経ってない。

さっきのは一体何だったのだろうか？まず分かる事はテレビに何が映ったということ。その後、それを見ていると頭痛がしてどこからともなく声が響いてきたという事。

よくわからない。けどこれは現実だ。この前見たイゴールさんが出てきたようなものじゃなく、昨日のよく覚えていないようなものでもない。今僕はちゃんと起きている。これは決して夢なんかじゃない。

じゃあこれは一体何だったのだろうか？今この場にあるもので怪しいものと言えばこのテレビぐらいだ。僕自身がおかしいという考えもあるけど、僕がおかしいのは去年の記憶に関するものぐらいである。今回のことで関係があると言えばあの頭痛ぐらいか。もしかしたらこの現象は僕の記憶と関係しているのかもしれないが、あるとすれば見た映像もしくはこの現象自体が関係しているといったところだろう。結局、テレビ以外には今の僕には怪しいものは考えられないのだ。

このテレビはこの部屋に備え付けられていたもので、おかしなものとは思いたくないのだが、そう考えないとさっきまでの状況が説明できない。取りあえず遠くからテレビを観察してみる。小形だが、何の変哲のない一般的なテレビだ。もちろん電源は落ちていてテレ

ビが付く要素は一切ない。

遠くから見ていてもらちが明かないので直接テレビの画面に触れてみる事にした。

テレビに指先が触れたその瞬間画面に波紋が起き、僕が予測していたテレビ画面の感触はなく、何か粘度の高い液体を触れたような感触があった。

「わっ」

思わず手を引いてしまったが、その後画面上に出ていた波紋は徐々に小さくなりやがて消えていった。

僕はテレビに触れた指先をしてみる。そこにあっただのはいつもの見慣れた僕の指だった。とりあえず触れただけでは特別害があるというわけではなさそうだ。

特別害はない。そう思ってしまったことが間違いだっただ。その時の僕は完全に無防備だった。未知なるものとの遭遇だというのに自分勝手な解釈の下、害がないと思いついてしまった。だからこそ何の躊躇もなく、テレビの中に自分の腕を突き入れてしまったのだ。

「!?!」

テレビの中に指先が入った瞬間得体のしれない空気を肌が感じ取り、同時に何かに引っ張られるように僕は頭までテレビの中に入ってしまった。

僕は慌ててテレビから頭を出した。ただ思っていたほどテレビ内に引き込む力が弱かったようで、僕は勢いよく後頭部をテーブルに強かに打ちつけた。

「ぐおっ。」

痛い。よく火花が散ると言っがその通りだと思う。僕は打ちつけた頭を抱えての蹲った。

「だいじょうぶ？」

控え目なノックの後、菜々子ちゃんが扉越しに訪ねてきた。自分ではあまり気が付かなかったけど、大きい音を立ててしまったのだろうか？

「うん、大丈夫だよ。起しちゃったかな？」

「すごいおと、したから…。」

やっぱりそうか。まあこんな時間に大きな音がしたらビックリするよな。

「そっか、もう大丈夫だから。」

「うん、おやすみなさい。」

「うん。おやすみ。」

足音が遠のいていく。菜々子ちゃんは部屋に戻ったみたいだ。

「それにしても、さっきのは何だったんだろう…」

“マヨナカテレビ”とやらは確かに映った。映ったものが自分の運命の相手かどうかはわからないがそんなのはどうでもいい。問題はその後だ。

テレビの中に自分の体が入る。“マヨナカテレビ”はそんな内容じゃなかった。この部屋のテレビはあまり大きくなかったので右腕と頭ぐらいしか入らなかったが、もしもつと大きなテレビなら体ごと入ってしまうのではないか？

…駄目だ、色々考えつきそうではあるけどまだ頭が混乱している。とりあえず明日、陽介と里中さんに相談してみようか…

今日僕は一つの“謎”に出会った。

もし運命というものがあるのなら、今日“マヨナカテレビ”を見たことが僕の未来を決定付けてしまったのだろう。

昨日薄くなった僕の中の霧は今日目に見えて濃くなった。

霧はまだ降りたままである。

第三話 4月13日(水) (後書き)

よつやく三日目終了です。内容的に次話は長くなりそうな予感が…
とりあえず頑張ります。

第四話 4月14日(木) (前書き)

若干長めとなっています。

第四話 4月14日(木)

一面の霧の中で 4月14日(木) 第4話

今日の一時間目は世界史だった。

何だろう。初めて会う人だというのにどこかで会った事があるよ
うな…ああそうか、月光館学園で去年日本史を教えてもらったあの
先生と似ているんだ、あのかぶり物が。

どうかあの先生のように一部の歴史ばかりを重点的にやるような
ことはしませんように…

放課後、帰るために教科書をかばんに入れているとすぐ隣りから
から噂話が聞こえてきた。内容は例の殺人事件に関して。興味を引
いた内容と言えはやはり第一発見者が小西さんだったということぐ
らいだ。

「よ、よう。あのね…」

「どうしたの、陽介？」

噂話に耳を傾けていると陽介がやってきた。昨日の“マヨナカテレビ”のことかと思っただが、何やら様子がおかしい。昨日の僕みために“マヨナカテレビ”を試して何かおかしなことが会ったのだろうか？

「や、その、大した事じゃないんだけど…
実は俺、昨日、テレビで…」

あ、やっぱりその…今度でいいや、あはは…」

やっぱり昨日陽介も何か映ったのだろう。

「もしかし「ねえ花村、聞いた？」

事件の第一発見者って、小西先輩らしいって。「たの…って里中さん。」

僕の陽介に対する質問は見事に里中さんにつぶされた。

「だから元気なかったのかな…今日、学校来てないっばいし。」

そして陽介には僕の発言は全然聞こえてないようで小西さんの情報に反応している。まあ好きな人の情報なのだから仕方ないのかもしれないけど。

「あれ？雪子、今日も家の手伝い？」

ちょっと僕が拗ね気味でいると帰ろうとしている天城さんに気付いた里中さんが天城さんに声をかけた。

「今、ちょっと大変だから…ごめんね。」

そう言い残すと天城さんは教室から出て行った。

「なんか天城、今日とつくべつ、テンション低くね？」

まだあまり交流がないから普段がどうなのかは分からないけど、今日はやっぱり元気がないようだ。

「忙しそうだね、最近…」

そういえば実家が老舗旅館でたまに手伝っているんだっか、天城さんも大変そうだな。

「そついや湊、さつき何言おうとしてたんだ？里中の話につき乗っちやって聞きそびれてたんだけど。」

「あつ、一応気付いてくれてたんだ。」

「まーな、話の内容は聞こえなかったけどさ。」

「そつか。いやね、なんか陽介様子おかしかったからさ、昨日“マヨナカテレビ”を試して何か映ったのかなって。」

「それ、あたしも気になってたんだ。花村は昨日試してみたの？」

陽介の様子はさておき、里中さんも“マヨナカテレビ”の結果は気になるようだ。

「え…そ、そついうお前はどつなんだよ。」

陽介は言いずらそうに里中さんに話を振った。：見たのかな、
“マヨナカテレビ”が。

「見た！見たんだって！女の子！」

里中さんは興奮気味にしゃべってる。まあ気持ちはわからないでもない。僕自身昨日あんな事を経験して若干興奮している。陽介や里中さんに昨日の事を話したいと思ってるんだ。

「…けど、運命の人が女って、どゆ事よ。誰かまでは分んなかったけど、明らかに女の子でさ、髪がさ、ふわっとしてて、肩ぐらいで、ウチの制服で…」

ここで里中さんの声のトーンが下がる。そりゃ、運命の人が同性ってなったらそうなるだろ。

でも、これで運命の人っていう噂は嘘と思っていいかな。知り合ってまだ間もないが、里中さんに百合の気はないと思うし。

「それ、もしかしたら俺が見たのと同じかも。
俺にはもつとぼんやりとしか見えなかったけど。」

「え、なに、じゃあ花村も結局見えたの！？」

「しかも同じ子…？運命の相手が同じってこと？」

「どちらかというところ“マヨナカテレビ”は全員同じものが見えて、
運命の相手っていうのはデマだったんじゃないかな？」

しかし里中さんはやけに運命の相手ってのにこだわるな。やっぱり女性はそういうのが好きなのだろうか？

「で、お前はとうだった？」

「昨日試してみたけど、僕も映ったよ。部屋の物の配置とかを考えると、何かが反射して映るといっなのはなさそうだね。」

あと、僕に分かったのは何もせずにテレビが映ったということぐらい。何か人が映っていたような気がするけど、どんな人かって判別できるほど鮮明じゃなかった気がする。」

「そうなのか。」

「第一、その時はひどい頭痛がしてね、“マヨナカテレビ”どころじゃなかったんだ。テレビが付くとどこからともなく声が響いてきたし。」

「頭痛に声？あたしがやった時にはそんなの全然なかったよ。」

「俺ん時もそうだったな。」

どうやらあの頭痛と声は僕だけに起きたようだ。

「頭痛自体はさ、3月に病院で起きてからたまにあるからいいんだ。」

「そうなのか、大丈夫なのか？」

「うん、大丈夫だよ。」

嘘だ。あの頭痛は何も無く起きるものじゃない。あの頭痛が起きるのは決まって去年の欠落した記憶に関わる事に遭遇した時だ。そしてその記憶というのはほとんどある特定の人物を差す。そして、

頭痛の大きさは顔をしかめるぐらいのものから意識を失うものまで人物と話題によって様々だった。ただ、何かしらの順位付けがあるようで、重要な物の場合、ひどい頭痛になる傾向があるようだ。

なぜそういうことが分かったのか、それは昨年度最後の最後の入院生活中のことだった。面会を許された人との会話中、何度かひどい頭痛がするので検査をたのんだ。結果は異常なし。最初はそれで安心して放っておいたのだがその後、頭痛が原因で気を失った。そこで初めて何か危ない状況なのではないかと思い、医師と協力して頭痛の原因を探した。そして状況を整理していくと一つの事実に辿りつた。

頭痛がするのは決まって友近や宮本といった現状会うことの許されている月光館学園の関係者と会っているときだけで、名前は教えなくてもなかったが頭痛がするのは決まった人物の話題が出たとき。その時、なぜか人物名に関しては頭痛がひどく聞き取ることができないということに気が付いた。医師が言うにはそれは僕の中にある防衛本能じゃないかとのことだった。なぜならば、その人物こそが僕が意識を取り戻してから初めて面会した人達であり、その人を見て僕はショック症状を起こしてしまったからだ。

友近達は僕が会えない人がいること、そしてその人たちと会うことが僕の命に関わることを知らなかったからその話題を僕に振ったらしいけど、そのせいで何度か大変な目に合った。もっともそのおかげで色々に対応策を講じることができたんだけど。

だから僕は昨日の頭痛はとても怪しいもの考えている。

もしかしたら昨日の“マヨナカテレビ”に映ってたのは僕と面会謝絶中の人かもしれない。だけど、だとするならその人は僕の記憶から抜け落ちている去年僕が住んでいた寮の住人のはずなんだ。

もしかしたら昨日の“マヨナカテレビ”に映っていたのは僕と全く関係ない人物なのかもしれない。もしそうなら“マヨナカテレビ”自体が僕の記憶と何か関係があるのかもしれない。

推測だらけで、自分にとって都合のいいように解釈しているかもしれない。けど、それがどんなに危険なことだとしても僕は失った記憶を取り戻したい。去年何を体験して、どんな風が変わっていったのかを僕は知りたんだ。でも、それに友達とはいえ他人を巻き込みたくはない。だから僕はこのことに関しては黙秘すると決めた。

「まあ、頭痛と声に関しては置いとくとして、その後さ、テレビがおかしいのになって思ってテレビを調べてみたんだ。」

「ふんふん。」

「そしたらさ、テレビの画面に触れたら手触りがおかしくてさ、なんかこうゼリーみたいというか、弾力のある液体みたいというか…」

「はあ？」

陽介は眼を丸くしている。

「それにさ、画面に波紋が立ったんだよ。まるで池に石ころを投げたように」

「何それ？」

里中さんも目を丸くしている。

「思わず手を引いちゃったんだけど、特に害はないようだからさ、思い切って画面をしっかりと触ってみようと思って触れてみたんだ。そしたらさ、なんか手がテレビの中に入っちゃって、そこから引き込まれるように頭までテレビの中に入っちゃってさ、テレビが小さ

かったから体全体は入らずに済んだけど、危なかったなあ。思わず驚いて思いつき頭をテレビから引き抜いたもんだからテーブルに後頭部を直撃しちゃったよ。」

「……」

何だろう？二人の沈黙が痛い。

「テレビに吸い込まれたってお前、動揺しすぎ？…じゃなきゃ寝落ちだな。」

「けどさ、夢にしても面白い話だね、それ。“テレビが小さかったから入れない”なんて変にリアルだしさ。もし大きかったら…」

「やめてよ、もしそうだったら今ここに僕はいないかもしれないんだよ。」

二人は夢の話だと思いついてるがあれが夢のはずがない。現に今僕の後頭部にはいまさにたんこぶが残っている。

「ははは、ごめんごめん。」

そう言えばウチ、テレビ大きいのに買おうかって話してたんだ。」

「へえ、今買い替えすぎー多いからな。何なら帰りに見てくか？ウチの店、品ぞろえ強化月間だし。」

「見てく、見てく！親、家電疎いし、早く大画面でカンフー映画見たい！

チヨー、ハイ！」

里中さんは何かのポーズをとっている。きっと好きなカンフーのアクションなのだろう。

「だいぶデカイのまであるぜ。お前が楽に入れそうなのとかな、ははは。」

二人はまったく信じてないみたいだ。まあ当然の反応と言えばそうなんだけど。ともかく、3人でジュネスに行くことになった。

ジュネス家電売り場。いくつもの新型のテレビが置いてあり、その中に一際大きいものがあった。正直どんな人が買うのだろうかと思ってしまうぐらいの大きさだった。

「でか！しかも高っ！こんなの誰が買うの？」

「さあ…金持ちなんじゃん？」

「そうだね。正直、庶民にはこんなサイズのテレビなんていらねえよね。」

また頭痛。今回の頭痛のキーワードは…金持ちかな？僕には金持ちの知り合いなんて特に思い浮かばない。きっと去年、金持ちの人と何かあったのだろう。頭痛の大きさからしてそこまで重要なキーワードというわけではなさそうだけど。

「そうそう。」

「それでき、ウチでテレビ買うお客さんとか少なくてさ、この辺店員も置かれてないんだよね。」

「ふーん…やる気のない売り場だねえ。ずっと見ていられるのは嬉しいけど。」

「まあ僕ならちょっと遠くに出て家電量販店で買っかな、テレビなら。と、そんなことを考えていると二人はおもむろに目の前にある大きなテレビに近づき、コンコンっとテレビの画面を叩いた。」

「…やっぱ、入れるワケないよな。」

「はは、寝落ち確定だね。」

二人がテレビに触っても何も起こらなかった。やはり二人は僕の言っていることを夢か何かと誤っているようだ。しかし、何度も言うように僕はあれが夢だとは思っていない。だとしたらなぜ昨日僕はあんなことになったのだろうか？

僕と二人の相違点…陽介は転校生だったと言ってたから僕が転校生という点は問題ではないはずだ。

ならば性別は？あっちには陽介と里中さん、つまり男女両方いる男だけというわけでもなさそうだ。

「だったら年の差はどうだろうか？いや、いくらなんでも1年生まれているのが早かったからテレビに体を通つ込めるといのは流石に荒唐無稽じゃないか？ただ、僕が生まれた年に何かあったと言ふなら？…駄目だ、それを調べる方法は僕にはない。とりあえず保留としておこうか。」

あと考えられるのは僕の経歴…か。正直言ってこれに関しては色々心当たりが多すぎる。11年前の両親を失った事故や去年の記

憶喪失。怪しいものばかりだ。

今の状況で考えられるのはこのぐらいかな。一番怪しいのは僕の経歴、特に去年の事柄に関して。次に年の違いといったことかな。

僕が考え込んでいると、気が付いたら陽介と里中さんはちよつと離れたところにいた。そつちに意識を集中させると「全然安くない！」とか聞こえてきたので、おそらくは陽介が里中さんにテレビを紹介しているのだろう。

それにしてもこのテレビは大きい。横幅が2メートルぐらいあるんじゃないだろうか？これだけあれば学校で陽介が言っていた通り体全体入ってしまいそうだ。

…ある意味これはチャンスではないだろうか？陽介と里中さんはこつちには気を向けてない。そしてここには元々店員もいない。確かにとても危険なことかもしれないが、今ならテレビの中についてもっと調べれるんじゃないか？下手に二人が僕の話信じなかった分、もしも僕がテレビの中に落ちてしまっても被害を受けるのは僕だけ。テレビに触っても何も起こらなかった二人なら僕がテレビの中に落ちてしまったことに気がついてもどうもできないはず。

そう思ったら僕はすぐさま行動に移した。まず周りを確認して、周囲の誰も僕の方を見ていないことを確認。そしたらすぐさま僕はテレビに向かって手を伸ばした。

後々思えばその時の僕は目先の欲求に目がくらみ、大事なことを

見落としていたんだろう。この一件で僕に何か起きたらきつと堂島さんや菜々子ちゃんは心配するだろう。陽介や里中さんも心に傷を負うかもしれない。そういった周囲の人に対する配慮が全く欠けていたんだろう。

何より、テレビに腕を突っ込んでいるやつを見た普通の人の反応というものを全く考えていなかったことが一番の失敗だった。

「やっぱり、入る。」

テレビに触れた感触は昨日と同じ。僕は昨日と同じ失敗はしないとわんばかりに足を踏ん張り、テレビの中に腕を突っ込んだ。

昨日と違ったのは腕を入れても中に引き込まれる様子がないという事。昨日と同じなのは制服越しに感じる得体のしれない感じ。そこまでわかった時点で僕は足の力を抜いた。どうやら今すぐ引き込まれるという事はなさそうだ。ただ、落ち着いてその空気を感じていると一際大きな頭痛と共にいつかどこかで感じたことのあるものということが心で理解できた。

頭痛の大きさからして結構重要な情報のようだ。

頭痛を堪えながら考え事していると、周りに陽介と里中さんがやってきてた。周りで何やら言っているようだが頭痛がひどくて何を言っているのか分からない。

そんなことより今はもつとここについて調べたい。とりあえず引き込まれる気配はないから頭を入れてみようか。息ができるのかそうでないのか、できるのなら最悪テレビの中に落ちても即座に死ぬ

ようなことはないだろう。

(頭痛が…また、ひどく…)

もう、周りから音が聞こえてこない。ただ頭が割れるように痛いだけだ。ただ、テレビの中でも息はできるようだ。

「これは、広場…？」

そしてテレビの中には何かよくわからない空間が広がっている。ただ、視界が良くない。ただ漠然と、広場らしきものがあることしかわからなかった。

「ちよつと広いな…」

見たところ相当広い空間のようだ。それに床までの高さもかなりある。今からこの中に入るのは危険だな。

そう結論付けた僕は最後に何かおかしなものがないかどうか軽く見てから頭を抜こうと考えていた。そろそろ頭痛の方も限界だ。何も今ここで無理をする必要はない。今日はこの辺にしておこう。

ただ、どこで間違えたのか、腕を入れた時なのか、頭を入れた時なのか、それとも今日二人と一緒に来ているときにこれを試した時点でののか、僕はいきなり感じた後ろからの衝撃に踏ん張ることもできずにテレビの中に落ちて行った。

「いつつ。」

なんとか反射的に受け身は取れたけどそれでも痛いもんは痛い。ただ、慣れてきたのか、頭痛はそれほど気にならないレベルまで下がっていた。今なら周りの音をちゃんと聞きとれそうだ。

「痛ってー、ケツの財布がダイレクトに…」

「もー、何なの、いつたい。」

「陽介…里中さんも…」

どうやら先ほど僕を押ししたのは二人のようだ。

「ねえ、どうして押したの？」

「どうしてって、お前、俺たちの会話聞こえてなかったのかよ。」

「うん、ちょっと考えごとしてたし、最後の方はテレビの中に頭突っ込んでたからね、聞こえなかつたんだよ。」

真顔で嘘をつく。本当のことはあまり話したくないんだけど、これはこれでどうなんだろう。まあ優しい嘘、ということ自分で自分を納得させておくか。

「客来てたんだよ。それなのにお前はなんか微動だにしないし。それでこっちが焦っちゃってな。足が滑ってお前にぶつかってそのまま一緒に落ちちまつたってところだ。」

「そうだったんだ。ごめんね。ちょっと不用心だった…」

焦り過ぎたのかな？ちょっと周りが見えてなかったみたいだ。

「ねえ、ここどこ？ジュネスのどっか？」

「んなわけねーだろ！」

「…うん、それはないと思うよ。」

里中さんの疑問でようやく周りの異常に気付いた。視界に映るのは一面の霧。視界の奥の方からいくつかの光が見える…あれがココを照らしているのだろうか？

「何がどうなってるんだ？」

「ねえ…何なのこれ…」

陽介は少し声が震えている。当然だ。今僕たちは『テレビの中』に居る。それはあり得ないことだ。里中さんも不安そうに周りを見渡している。こういった未知の状況下ではこういった反応が普通なのだろう。今の僕のようにあるがままにこの状況と受け止めている方が異常なんだ。

頭痛がする。そしてこの空間の雰囲気はどこかで感じたことがある気がする。今は無理には記憶を掘り起こさない。もしそれによって頭痛がひどくなったら、もし意識を失ってしまったら、下手をすれば取り返しのつかない状況になるかもしれない。今僕がすべきことはまず落ち着くこと。そして物事をしっかりと観察すること。

どうしてこういう事態にある程度落ち着いていられるのか。なぜこの得体のしれない空気を『懐かしい』と心の奥底で感じているのか。分からないことはいくつもある。でもそれはここを脱出してから考えよう。

「とりあえず里中さん、陽介、ケガはない？」

「あたしはちよつと体を打っただけ。何ともないよ。」

「俺は若干ケツガ割れた…」

「それはもともと。よかった。ケガはないようだし、陽介にいたつては冗談を言えるほど落ち着いてるみたい。」

「ありがとよ…でも、お前の方が落ち着いてるだろ。つーか落ち着き過ぎ？」

「どつちもどつちだよ…」

里中さんは呆れている。でも少し場の空気が軽くなった。

「ねえ、ちよつと深呼吸しよっか？」

「深呼吸？」

「うん、里中さん。こういう時こそ落ち着かないと。落ち着いてきたら何か分かるかもしれないしね。」

「おっ、いいな。やるうぜ。」

3人で大きく息を吸い込み、そして吐…

「なんじゃこりゃ!?!」

「どうしたの?」

「な、なに。ついに漏らした?」

「漏らした?」

漏らすって何を!?

「馬鹿、見てみるって、周り。」

ちょっとは目が慣れてきたのか、少し遠くまで見えるようになった。

目に映るのはテレビとかでたまに見るスタジオっぽい物。

「これって…スタジオ?」

それにすごい霧…じゃない、スモーク?

こんな場所、うちの町にないよね?」

「あるわけねーだろ。」

陽介は若干呆れているようだ。

「どっなっぺなんだこりゃ…」

「やたら広そうだけど…」

「そうだね。霧が濃くてよく見えないけど少なくとも壁らしきもの

は見えないね。」

「ねえ、どうすんの?」

「これからどうするか。確かにこれは問題だ。何はともかく、ここから脱出しなければならぬ。」

「そういう意味ではここにとどまるという選択肢はほとんどないと言ってもいい。ここでやみくもに待っていても事態が好転するとは思えない。」

「ならばどうするか。やることは一つだ。」

「行ける範囲、できる範囲でいいから周りを調べてみよう。」

「うん。けどさ、調べるって何を?」

「ここに来るとき、テレビの中に入って僕たちは落ちてきたよね。」

「ああ。」

「だったらきつと一番わかりやすい出口は僕たちが入ってきたところ、つまり僕たちの頭上ってことになるんだ。」

「僕は指で上を差した。」

「ちょ、ちょっと待ってよ。そしたら私たち帰れないじゃない。」

「おいおい、どどどーすんだよ。」

二人は事態の深刻さに気付いたようだ。そう、僕たちが入ってきた所というのは少なくとも今すぐ行けるような場所にはない。

「ねえ、早くかえろーよ。こんな薄気味悪い所からさ。」

「だから！その出口側からねーんだろーが！」

「やだ、もう帰る。今すぐ帰るー！」

「二人とも落ち着いて。」

さつきまではまだ落ち着いていたんだけど…当然か。少しでも落ち着いてきたら自分たちの状況が分かってくる。

帰るための方法がわからない。

それは一度落ち着いた二人をパニックにさせるには十分な情報だった。

「で、でも、どうしたら…」

「いいから！帰るためにもいったん落ち着こうよ！」

「！？」

ちょっと乱暴だけど、一度怒鳴ることにした。里中さんは完全にパニック状態だ。このままじゃあ脱出できるものもできなくなってしまう。

「そ、そうだな。う、うん。落ち着いて考えよう。冷静に、冷静にな」

「う、うん。ごめん。ちょっと取り乱してた。」

「ううん。こっちこそ怒鳴ってごめんね。」

「いいよ、悪いのはこっちなんだしさ。」

里中さんもどうやら落ち着いてきたようだ。陽介は最初からある程度の判断力は残っていたようで目をつぶって何やら考えている。

「とりあえず、出口を探すぞ。」

陽介の結論は至極当たり前のものだったが、それでいいと思う。

「そうだね。まずはそうしようか。」

「でもさ、ホントにここ、ホントに出口とかあんの…?」

里中さんはまだ不安そうだ。

「現に俺ら、ここに居るんだ…ってことは、絶対入ってきた場所があるはずなんだけど…」

「さっきも言ったけど、たぶん入ってきたのは遙か頭上なんだよね

…」

「け、けどよ、他にも出口があるかもしれないだろ。」

「うん、だからさ、みんなで探しに行こう。単独行動は危ないしね。」

「

「わかった。」

一面の霧の中で、不安に押しつぶされそうになりながらも僕たち3人は歩き出した。

それにしてもここはおかしな場所である。何かしらの意思があるんじゃないかと思うほどに霧に濃淡がある。

僕たちは霧が薄く足場がちゃんとある場所を選んで移動している。しかし、それは誰かが僕たちをどこかに誘導したいのではないだろうか？

…駄目だ。思考が悪い方悪い方へと進んでいく。用心はすべきだが、気を楽しみにしないとこんな状況では心が持たない。

「なにこじこじ…」

さつきんトコと、雰囲気違うけど…」

里中さんの言う通り、気が付くと先ほどまでとは全く違う雰囲気の場所にいた。

「建物の中つばい感じあるけど…」

くっそ、霧スゴくてよく見えねえ…」

「この先に何かあるみたいだね。」

赤と黒の歪な螺旋を描いたドアらしきものが見える。しかもその

螺旋は微妙に動いている。はっきりいつて怪しい。出口が有りそうといった意味ではなく純粹に怪しい。

「大丈夫？」

却って遠ざかってたりしない？」

里中さんはやっぱりまだ不安そうだ。少なくとも今から進む先にあからさまに怪しそうなものがあるのだから有る意味当然なのだが…

「もともとの目的地がどこにあるか分からないんだ。ある程度は勘に従っていくしかないんじゃないかな？」

「そーだな。」

今は歩かないと始まらない。虎穴入らずんば虎子を得ず。たとえあからさまに怪しいものでも今の僕たちにはそれに頼らなくちゃ帰れない。

この扉の先で何が待ち受けているのか？何が起きてもいいように僕は踵をほんの少しだけ浮かせて陽介と一緒にドアに向かって歩き出した。

そこは部屋だった。窓があり、ベッドがあるあまり多くの物は置かれてない質素な部屋だった。

「お、この辺ちよつと霧薄くない？」

「うん。少なくとももある程物が度見える程に薄くなったね。」

さつきまでならこの部屋にどんなものがあるのかさえ分からなかっただろう。

しかしこれで謎はまた増えた。どうやらこの霧はどんな場所でも様に発生しているわけではなさそうだ。

この異常な空間に立ち込める異常な霧。ここは、この霧はいったい何なのだろうか？

「圏外か…ま、当然か…。」

陽介は携帯を取り出してしまった。なるべく落ち着こうとしてはいたが、やっぱり完全には落ち着けていないようだ。僕は携帯を使うという事を全然考えてなかった。しかし携帯は通じないか…

「ちょっと、さっさと行かないでよ、よく見えないんだから…」

「…!?」「」

僕と陽介は驚いて後ろを向く。里中さんついてきてなかったんだ…正直言ってこれは問題だ。里中さんはまったく悪くない。こんな異常な場所に居るんだ。里中さんが怖がってすぐには動けないこともあるだろう。実際、里中さんはここにきてからずっと不安そうだった。

ここで問題になるのは僕と陽介が里中さんが付いてきてなかったことに気付けなかったことだ。僕と陽介は先頭を歩いていた。そういう位置に立つ人は本来小さな集団なら、全体に気を配らなくてはいけない。

しかし、今回里中さんが付いてくることに遅れていることに気が付けなかった。今回は何も起こらなかったが、もしも何か起こってしまつたら大変だ。そう、何か起こってからじゃ遅いんだ。普段ならこんなことはないのに…

「え…なにこじ…」

行き止まりだよ？出口なんてないじゃん！」

「見た目も気持ち悪くなる一方だな…」

細部までは見えないけど、一部の壁には一面にポスターが貼られている。ただ、そのポスターからはなんかこじ、怨念とでも言えればいいのだろうか？何とも言えない気配がする。

「アーツ！」

つか、もう無理だぜ…」

「ど、どうしたの？」

まさかこの霧が何かしらの影響を陽介に与えていたの？僕には特に影響がなかったと思うけどどうして陽介だけ？いや、この霧の影響には個人差があるのか？里中さんは？彼女ももしかして何かの影響があつてそれを我慢しているんじゃない

「俺のボーコーは限界だ…！」

「なんだよ、それ!？」

僕の心配を返せ!

「え、有里君…?」

「え、ああ、ごめん。」

恥ずかしい…あんまりこういう突っ込みはしないようにしていたの…

「て、ちょ、花村!？何してんの!？」

気が付くと陽介は壁際に居た。あれはまさか…
いやいや、僕の目の前ならともかく、里中さんがいる前でそんなことをするのは…ホントに追い詰められてたんだね。

「出さなきゃもれんだろが。」

「そこでやんの!？」

かんべんしてよ…」

「み、見んなよ!見られてっとなないだろ!」

「し、ごめん。」

確かに見られていると出にくい。僕はすぐに後ろを向いた。

「ああああ〜出ねえええ〜!ポーコー炎になったら、お前らのせい

だぞ。」

「知らね…っの…」

「僕は後ろ向いてるよ…」

里中さん、後ろ向いてやってください。武士の情けです。

「にしても…何なの、この部屋？」

このポスター…全部、顔、無いよ？切り抜かれてる…
メチャメチャ恨まれている…とかつて事？」

「ホントだ…顔の部分だけ切り取られている。」

ポスターは全て同じものだった。ただ、よく見てみると顔の辺りが切り取られている。ホラー系の漫画や映画でありそうなシチュエーションだけど実際に遭遇するとこの上なく気味が悪い。

「この椅子とロープ…あからさまにマズイ配置だよ…輪っかまであるし…これスカーフか？」

陽介が見ていた物は部屋の真ん中ぐらいいにあった椅子と、照明器具にくくりつけられた輪っか状の何か。その輪っかはまるで「ここで首を吊れ」と言わんばかりの位置にあった。

「ね、戻ろ…さっきんトコ戻って、もっかい出口探したほうがいいよ…」

「そつだね。他にも道があるかもしれないし一旦戻ろうか。」

正直言ってここは居心地がいいとは言えなかった。落ち着いて次の行動を考えるにしてもココじゃまとまるもまとまらないだろう。この意見には陽介も賛成だったようで僕たちは出口へと歩いて行った。

「なあ、あのポスターってさ、どこかで…」

出口付近で陽介は突然止まり、ポスターを観察し始めた。どうやらあのポスターに見覚えがあるようだ。僕は芸能人や政治家とかにあまり興味がないから全く見覚えがないんだけど…

「いいから行くよ、もう！やだ、こんな場所！」

それに…なんか、ちょっと気分悪い…」

里中さんはやっぱりこの場所が怖いようだ。まあ僕も若干は怖いし、普通はこんな状況でこんな場所に居たら怖いと思うのは当然だろう。

「大丈夫、里中さん？」

それよりも問題なのは気分が悪いということだ。僕はちょっと普段より疲れてるかなぐらいにしか感じてないんだけど、里中さんは今はつきりと『気分が悪い』と言った。あまり考えたくはないが、ここはいるだけで人体に何らかの影響を与えるような場所なのだろうか？

「そっぴや、俺も…」

「陽介もなの？」

ちょっとまずいかもしれない。この部屋だけがまずいのか、それともこのテレビの中という異常な空間自体がそもそも有害なのか、その判断はつかないがまずこの部屋から出るというのは間違いじゃないだろう。

「最初に着いたあの広場まで戻ろう。僕はまだ大丈夫だけど、ここは危ないかもしれない。」

「そうだな、なんかマジ気持ち悪くなってきた…」

湊、おまえはほんとに大丈夫なのか？」

「うん、ちょっと体が重く感じるけど気持ち悪くはないよ。」

「そっか。」

どうして僕だけ影響が薄いのか？テレビの中に入れた事、ここはどこなのか、他にも沢山の問題があるなかでそれだけが僕は気になつた。

「ふう、やっと戻ってこれたよ。」

元いた広場まで道なりにまっすぐとはいえ、体調が悪いからかとても疲れた。ただ、あの部屋から出たからか少しは気分が良くなつた。やっぱりあの場所は少なくとも精神的に悪影響を与えていたよ

うだ。

「って…なに、…あれ？」

なんだろう？ 里中さんは広場の真ん中ら辺を見ている。

「おわ！ な、なんかいる。」

「誰！？」

気が付くと僕は一步前に出て半身に構えていた。あれは誰なのか？ いや、人とも限らない。むしろ人がいる方が不自然な気もする。あそこにいるのは味方なのか敵なのか…いや、敵味方関係ない何かかもしれない。

僕は緊張で肩に力が入っている事を分かっていつつもその力を抜く事も出来ないまま霧の向こうをただ睨みつけていた。

それは奇妙な足音を立てて霧の中からやってきた。高さは1m20cmぐらいだろうか？ そしてその容姿は

「何これ？ サル…じゃない、クマ？」

里中さんの表現した通り、一言で言うならクマ…なんだろう？ それは大きなぬいぐるみ、もしくはきぐるみとだろうか？ 明らかに場違いな存在だった。

「何なんだ、こいつ…」

「これ、ジュネスのイメージキャラクターか何か？」

正直言つてどこかのテーマパークとかにあるマスコットキャラクターって感じがする、このクマらしき物体は。

「チゲーよ！こんな珍妙なヤツ、イメージキャラクターにすつかよ。」

「珍妙？そ、それよりキミらこそ誰クマ？」

「喋った…！？」

「それより語尾がクマ？」

キャラクター付けというやつだろうか？

「だ、誰よあんたっ！？や、やる気!？」

里中さんはけんか腰だ。もしかしたら大きな声を出すことで自分を奮い立たせているのかもしれない。

すると目の前のクマ（仮称）はいきなり体を縮めた。

「そ、そ、そんな大きな声出さないでよ…」

目の前のクマは怯えている…なんかこっちが悪者みたいだ。

「ねえ、キミは誰なんだい？」

僕は肩の力を抜き、なるべく優しくクマに話しかけた。確かにこのクマは怪しい存在だが、ここで会えた初めての知性をもった存在だ。それに都合よく日本語が通じる。出来るだけいろいろな情報を手に入れておきたい。

「クマはクマだよ？ココにひとりで住んでるクマ。ココは、ボクがずっとひとりで住んでるところ。名前なんて無いクマ。」

「ずっと住んでることろ…？」

このテレビの中は前からあるのだろうか？

「とにかく、キミたちは早くアッチに帰るクマ。最近、誰かがココに人を放り込むから、クマ、迷惑しているクマよ。」

「は？人を放り込む？何の話だ？」

「誰の仕業か知らないけど、アッチの人にも少しは考えて欲しいって言うてんの！」

誰かがココに人を放りこんでる？

「ちょっと、何なワケ？いきなり出てきて、何言ってるのよ！

あんた、ダレよ！？ここは何処よ！？」

何が、どうなってるのっ！？」

「里中さん。ちょっと声落として。このクマ、怯えてるから…」

里中さんが声を張り上げるとクマは明らかに怯えだした。

まあ、言葉はきついけど僕たちが言いたい事はすべて言ってくれた。後はこのクマが答えてくれればいいんだけど…

「ちょ、ちよつと…」

里中さんが怖いのか、クマは僕の後ろに隠れてしまった。でも、何で僕？

「さっき、言ったクマよ…」

と、とにかく早く帰った方がいいクマ。」

「要はココから出てけってんだろ？」

俺らだってそうしたいんだよ。けど、出方が分かんねーっつってんの！」「

「ムツキー！

だから、クマが外に出すっつってんの！」

「えっ？」

このクマ今何を…

「だから…分つかんね　な！出口の場所が分かんねーっつってん…
…っつて、へ？」

陽介もクマの言った意味が理解できたようだ。でもどうやって？

するといきなりクマはよくわからない動きをしたかと思うと僕の

目の前に何かが現れた。

「うわっ」

「んだこりゃ!？」

「テ、テレビ…!？」

「どうなってんの!？」

「あ、テレビだったんだ…」

ちょうど僕に対して後ろ向きに現れたから分からなかったけどこれはテレビらしい。おそらく昔のブラウン管の物だろうか?それが3台重なっている。一つ一つがそれなりの大きさをしているので全高は2m50?ぐらいある。

僕もテレビの前に行き、テレビを観察する。見た目は何の変哲もないただのテレビだ。これでどうやって帰るのだろうか?

「さー行って行って、行ってクマ。ボクは、忙しいクマだクマ!」

「うわっ、ク、クマ!？」

いきなりクマが僕たちをテレビ向かって押してきた。テレビはどつやら中に入れるようで僕の頭はすでにテレビの中に入りそうだ。

「い、いきなりなに!？」

「わ、ちよっ…無理だっ!」

「押すなっ!」

「クマが押ししてるんだよ！」

意外とこのクマ、力があるようでどんどん押されていく。この空
間のせいかな、普段通りの力が出ない僕では踏ん張りきれることがで
きず、僕たちはテレビの中に押し込められていった。

「あれ、ここって…」

「さっきの家電売り場…だよな。」

「戻ってきた…のか？」

目の前には僕が頭を突っ込んだ物と同じテレビがある。そして、
周囲からはジュネスのテーマ曲らしきものが流れている。

ただいまより、1階お惣菜売り場にて、恒例のタイムサービス
を行います。今夜のおかずにもう一品、ジュネスの朝取り山菜セッ
トはいかがでしょうか。ヤングもシニアも、お見逃しのないよう、
お得なタイムサービスをご利用ください。

タイムサービスの宣伝か…ってことはもう6時ごろってことかな
？大体タイムセールってそのぐらいのはずだから。

「げっ、もうそんな時間かよ！」

「結構長く居たんだ…」

「そうだね…」

もしくはあそこは時間の流れがおかしいのかもしれない。いくらなんでもあそこに2時間近くもいたとは考えられない。しかし、今の僕の携帯は午後6時3分を表示している。この携帯は電波を受信して自動的に時間を合わせるようになっていたので携帯の時間ではないまい。信用ができない。もしアナログ時計でも持っていたら別なのだが、あいにく僕は普段腕時計をしないので今は確認のしようがない。

「そうか… 思い出した、あのポスター…」

ほら、見るよ。向こうで見たの、あのポスターだろ！」

「何よ、いきなり。」

僕と里中さんは陽介の指差している方向を見てみた。そこにはさっきの部屋に貼ってあった物と同じポスターが貼ってあった。それはあの部屋のものとは違ってちゃんと顔がある。

「ホントだ、あれだ… さっきは顔なくて分かんなかったけど、“柊みすず”だったんだ。最近、ニュースで騒がれてるよね。」

「何かやらかしたの？その人。」

芸能関係には本当に興味が無いから何をした人なのか全く分からない…。確かに最近テレビとかで見たことあるような顔なだけだ…。

「旦那が、この前死んだ山野アナと不倫してた…とかって。」

「そうなんだ」

もつとそういうことも勉強した方がいいのかな？

「おい、じゃ、ナニか…？さっきのワケ分かんない部屋…山野アナが死んだ件、なんか関係が…？」

「そっぴゃ、あの部屋…やばい“輪っか”がぶら下がったりしてたけど…」

「ちよつと、陽介…」

確かに関係がないとは言いつねないけど、そっぴゃのは僕たちが考えることじゃなくて、警察とか、もしくは“探偵”の仕事だ。正直、僕たち高校生が首を突っ込むにしては少々話が重すぎる。

「わー、わー、やめやめ！おい、やめようぜ、この話。」

「花村が振ったんでしょ…」

「そっぴゃだけよ、俺、今日の事まとめて忘れる事にするね。なんかもう、ハートの無理だから、うん。」

「なーんか、寒くなってきた…気分も悪いし…、帰る。」

「そっぴゃだね。」

里中さんは口には出さなかったが、陽介の意見に賛成のようだ。

「ただ僕は今日のことを忘れるつもりはない。記憶喪失になつてから1ヶ月。ようやく掴んだ『場所』という僕の記憶に関わる情報だ。この間のイゴールさんの夢の件もある。きっとこれは僕の記憶の回復に関わってくるだろう。」

「今日明日にでももう一度テレビの中に入ろうというわけじゃないが、もっと周到な用意をしてまたあそこに行こう。確率は低いかもしれないが、またあのクマに会えればテレビから出ることだって出来るかもしれない。」

「そんなことを考えながら陽介と里中さんと別れ、堂島家に帰るところにした。」

「ただいま。」

「玄関に入ると堂島さんの靴があつた。今日はもう帰ってきてるようだ。」

「おう、お帰り。」

「カップラーメン 食事中だったので制服のまま食卓につく。」

「少し眩暈がした。やっぱりまだ疲れが取れてない。あそこにいた影響なのだろうか？」

「あ…のな、まあ、知らんとは思つが…、小西早紀って生徒の事…何か聞いてないか？」

堂島さんは何か言いにくそうな表情でいると、何とも意外な人物の名前が出てきた。

「小西さん？山野アナの第一発見者の？」

「ああ、まあな」

「それなら、今日は学校を休んだって話を聞いたけど。」

「ああ、そうなのか…実は…行方が分からなくなったと連絡があつてな。うちの連中で探しているんだが、まだ見つかってない…」

「小西さんが？」

確かに昨日は元気がなかったように見えた。きっとそれは死体を見てしまったからなんだろう。昨日いた刑事らしき人も戻してたくらいだし。

でもいきなりいなくなったて言うのは分からない。昨日会っただけだが、そういう風な人物とは思えないのだが…

「ハア…仕事が増える一方だな…」

…次は、霧の町に今も暗い影を落としている事件の続報です。稲羽市で、アナウンサーの山野真由美さんが変死体となって見つかった事件。被害に遭う直前の山野さんの行動ははっきりしていませんでしたが…地元の名所として知られる“天城屋旅館”に宿泊していた事が、警察の調べで分かりました。

「天城屋旅館…」

「なんだ、知ってるのか？」

「うん、クラスメートにその娘さんがいるから。」

それで疲れていたのな、天城さんは。

一人での宿泊だったという事でしたが、傷心旅行といった事だったんでしょうか…

その後は昨日のようなコメンテーターによる不快なコメントが続いた。どうしてあんな人がテレビに出ているのだろうか？テレビ番組の品格にも影響しそうなものだが

…次は気象情報です。事件のあった稲羽市周辺ではこれから朝にかけて、霧が出やすいでしょう。視界が悪くなります。車の運転などの際には、十分な注意を…

「ねえ、ラーメンもういい？」

「まだ早いだろ。」

ずっと菜々子ちゃんは黙ってるなと思ったら。菜々子ちゃんはラーメンができるのを待っていたようだ。

「ツクシユン」

くしゃみが出た。そういえばさっき雨で少し濡れちゃってたんだっけ。

「風邪か？いかな。新しい環境で疲れがたまってるんだろ。それにお前には前科がある。今年は去年みたいな事にはならないようにせんとな。」

菜々子、薬。」

「うん。」

菜々子ちゃんは立つと薬が置いてあるだろう場所に走り出した。

「薬飲んだら今日はもう寝ろ。わかったな。」

「はい。」

僕もまた留年はしたくない。ここは堂島さんの言うことに従っておこう。

今日、僕は懐かしい空気を感じた。それは決して心地いいものではなかったがそれでも八十稲羽の地で出会った初めての大きな僕の記憶に関するものだ。これは一体何なのだろうか？

“マヨナカテレビ”とは？

あの広場は？

巷を騒がせている殺人事件とあの場所の関係は？

僕はまだ何も知らない。僕は運命というものは信じないが、きっと僕はこれらに関わっていくだろうと漠然と感じていた。

明日、僕は“誰か”に会う。そんな予感が僕にはあった。そしてその“誰か”を僕はきつと知っている。顔も、声も、姿も分からないけど僕がその“誰か”をもつ忘れることはない。だって、その“誰か”は僕の　なのだから。

今日の出会いにより、僕の中にある大きな霧の一部が晴れようとしている…

第四話 4月14日(木) (後書き)

おそらく次回で物語の導入部分が終わると思います。

誤字脱字、表現におかしな部分がありましたら感想などにて報告してもらえると助かります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3282t/>

一面の霧の中で

2011年7月14日09時13分発行